

正史を彷徨う

Part IX

森隆一



百舌鳥古墳群(上)と古市古墳群(下) (Wikipedia より)

Part IX

序

本 Part では、12 章から 17 章の考察を加味して、東遷を考察し、一区切りとしたいと思っている。

倭王の北九州移住も東遷と言えないことはない。また、九州内の征服も、熊襲を除いては、東に向かっている。すなわち、広義には、熊襲平定を除くものは全て東遷と言えるが、広げ過ぎの気がする。ここでは、倭が九州の拠点(邪馬台国)から瀬戸内海沿岸を征服して、最終的に大和国に恒常的な都をつくる過程を単に東遷としたい。恒常的な都とは藤原京であろうが、これでは時代がかなり下がる。漠然としているが、明日香(・桜井)に宮が造られるまでと考えている。この期間は晋書と宋書の時代に相当すると考えている。九州での拠点(宮)の位置としては、古事記では高千穂宮で日向国となっている。日本書紀では明記されていないので、国名の現れない豊国とした。神武東征は神武東遷とすべきであるが、これは区別をつける意味でこのまま東征を用いることにする。

飛鳥については、明日香と近つ飛鳥を用いてきたが、近いというのは避けて、今後は、太子町・羽曳野市辺りを河内飛鳥、奈良南部の橿原市周辺を単に飛鳥、明日香村を明日香と書き表すことにする。

18 東遷追考

序

国産み神話と各天皇紀から得られた、東遷に係する国々の位置のイメージを示したものが次図である。

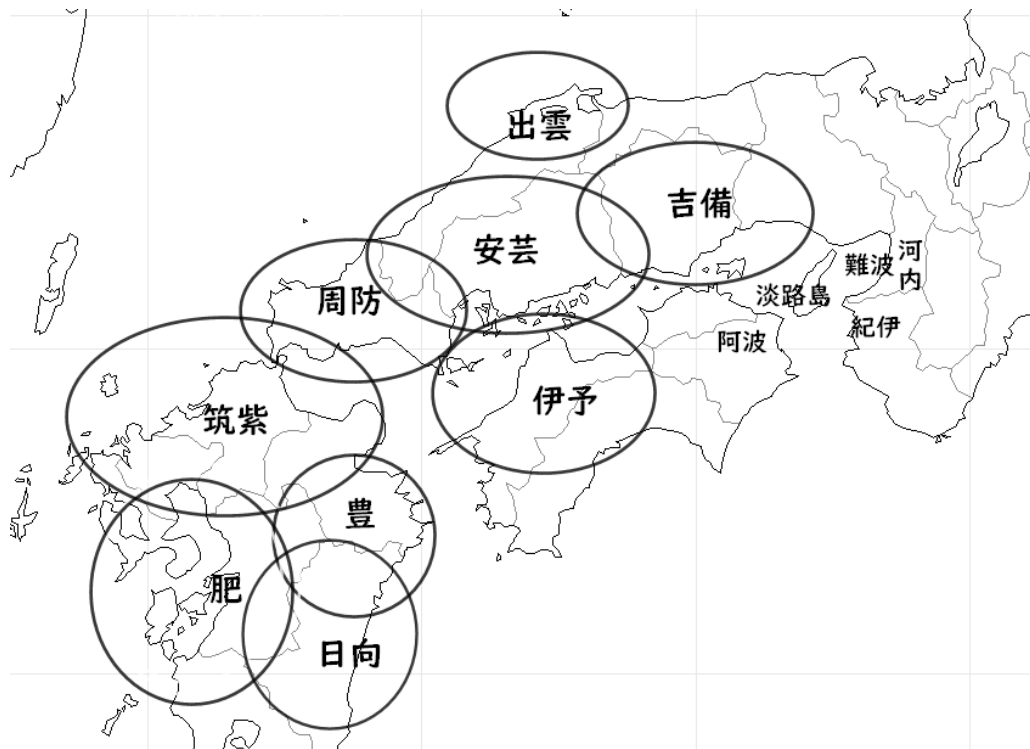


図 IX01 東遷の国々のイメージ

11 章で神武東征を扱い、神武東征の出発地、すなわち、邪馬台国は豊の国またはその中にあると考えた。図 IX01 の豊と肥はもう少し北にあるのかもしれない。また、征服前の出雲はもっと大きかったはずであるが、資料がない。九州北部の Flood Maps が次の図 IX02 である。



図 IX02 国東半島周辺

神武東征では、筑紫国の崗水門の次は安芸国の埃宮となっている。

今抱いている東遷のイメージは次である。

移住 征服 東遷

朝鮮 北九州 周防 安芸 吉備 河内

伊予・中九州 淡路

中九州・伊予・周防の順番は決めかねている。神武天皇紀で宇佐が筑紫国と書かれていたように、周防の内の下関周辺は、筑紫国であった時期があったのではないかと考えている。

筑紫湖(遠賀川河口部)に達した後、遠賀川を遡上する前に、玄界灘沿岸の搜索は行われたはずである。九州の支配地を筑紫、非支配地を熊襲と呼んでいた時期があった。その後、豊・肥・日向と征服地を拡げていった。

9章で考察したことから、景行天皇紀の記事はこの過程を述べていると考える。すなわち、日本武尊により、豊・伊予・周防の征服が行われた。この後、出雲を征服した後大山で敗れた。岩見から美作に至る中国山地は、鉱物資源が豊かな地帯である。この過程は一人の王ではないのかもしれない。この伊予・周防の征服を東遷の開始と考えている。

一方、景行天皇により日向・肥の平定が行われた。これは、東遷の前に行われたのか、並行して行われたのかが考えられるが、倭王朝は2方面作戦が可能なほど充実したと考える。図 IX02 の状況である。

次図は、図 VI01 と VI02 を1つに纏めたものである。

ここまで書き込むと雑然とした印象をもつが、多くは玄界灘から瀬戸内海沿岸・大阪湾に配置されている。下関の住吉神社を除いて、周防が空白となっているのは何故だろうか。

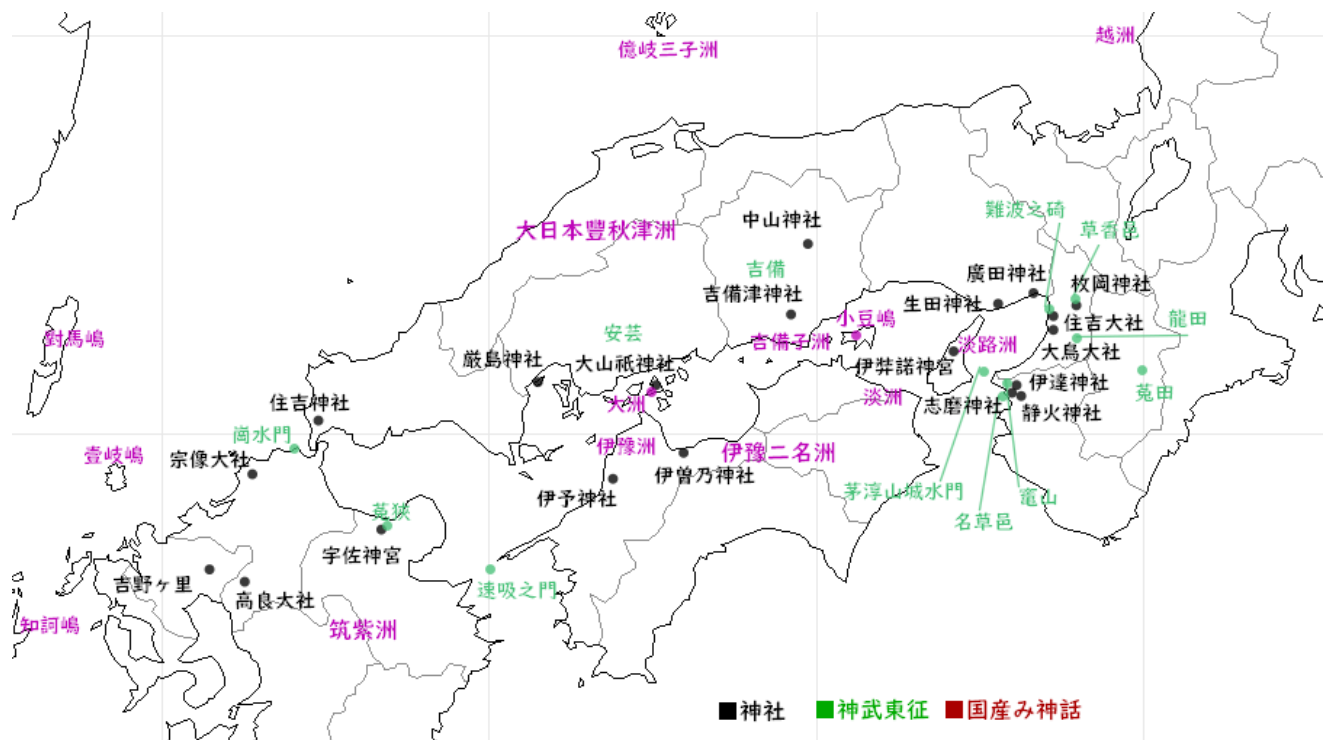


図 IX03 東遷

寄り路

次に示す図は、日本の摩崖仏の分布である。摩崖仏の多くは鎌倉時代以前に造られた。

この図と東遷に関する図、V02・VI02、とが似ているのではないかと思ったのは、本稿を執筆するきっかけの1つである。



図 IX04 日本の摩崖仏分布

18.1. 三国志の国々

三国志の女王国への帯方郡から女王国への旅程は、2.4 節で取りあげ、12.3 節で投馬国と邪馬台国について再考した。重複するかもしれないが、改めて考えることにする。

三国志に書かれた各国の戸数と末盧国以降の移動を再掲する。

対馬国：千

一大国：三千

末盧国：四千（500 里） 伊都国：千（100 里）

奴国：二万（100 里） 不彌国：千（水行 20 日）

投馬国：五万（水行 10 日 陸行 1 月） 邪馬台国：七万

これらの国の位置については、投馬国を除き、図 I04 と変っていない。対馬国と一大国は対馬と壱岐島としか考えようがないが、島の大きさを考えれば、戸数が千と三千というのは、逆ではないかと思える。倭国の直接の支配下にある戸数と理解しておく。

また、伊都国が千というのも、魏の使いが留まる場所としては、少ない気がする。万の間違ひではないかとも、思える。戸数が千の国は他に不彌国がある。これらは、航路の中継地と兵站(軍事的拠点)ではなかったかと考える。

正史での楽浪郡の戸数を調べてみた。正史には地誌があり、ここに全ての郡の戸数・口と県名が書かれている。三国志には地誌がないので、漢書・後漢書・晋書に数書に書かれている楽浪郡のものを示す。なお、漢末に楽浪郡から帯方郡が分離された。

楽浪郡 漢書： 戸 62,812 口 467,148 県 25

後漢書： 戸 61,492 口 257,050 城 18

晋書： 楽浪郡 戸 3,700 県 6

帯方郡 戸 4,900 県 7

投馬国の五万邪馬台国の七万は楽浪郡と同じレベルである。楽浪郡は北朝鮮から東部を除いた部分であり、気候は雪の少ない道北に近いと思われることを考慮しても、両国の戸数はかなり多い気がする。

末盧国

東松浦半島のどこかとする事は異論がないであろう。候補としては2カ所が浮かんでくる。1つは、秀吉の文禄・慶長の役で、進攻基地となった名護屋城やその東の加部島か呼子である。もう1つは唐津である。加耶島(呼子・名護屋)はFlood Mapsの図 IX05MapsとGoogle Mapsと差がないが、唐津は、虹の松原が洲となり、内側は汽水湖のようである。どちらでも判断がつかないし、どちらでもよいので、遺跡が発掘されることを期

待するしかない。

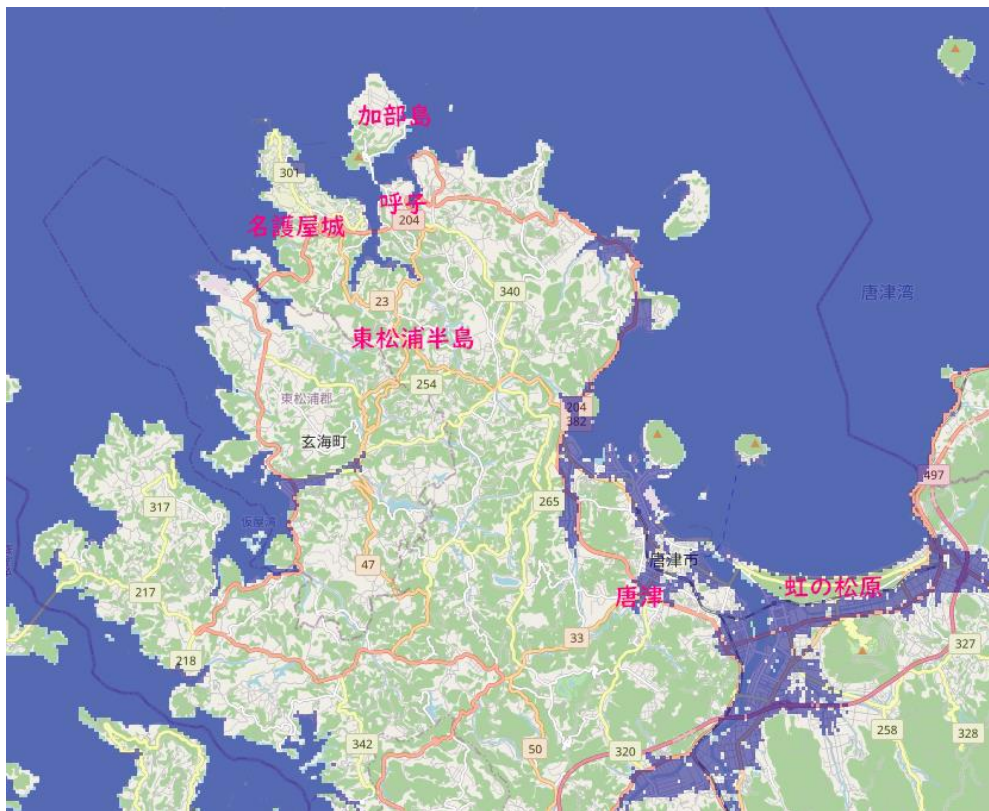


図 IX05 Flood Maps 東松浦半島

伊都国

魏の郡使が留まる場所であり、大率が置かれた場所である。

伊都国としては糸島が定説であり、本稿でもこれを採用している。地図としては、図 V23 福岡、V24 北九州 でも十分かもしれないが、もう少し細かい図 IX06 を準備した。怡土城については、今の話題ではない。

この図で、九州大学伊都キャンパスは図の文字の元岡のすぐ上辺りにあ

る。



図 IX06 Flood Maps 系島

伊都国が 郡使往來常所駐 とあるのに、千余戸と戸数が少ないのは若干奇異に感じることは前に述べた。倭王直属の軍隊(と住民)が千戸であったとしておく。

まず、Wiki「系島半島」歴史 を引用する。

系島半島一帯は古代の伊都国があった場所とされる。かつては万葉集や和名抄に怡土とも表記された。遺跡も多く存在し、とりわけ伊都国については、系島市平原遺跡（弥生時代後期）を含む曽根遺跡群（国の史跡、弥

生前期～古墳時代中期)や三雲・井原遺跡群(弥生中期～古墳前期)がその所在地だとされる。弥生時代になると瑞梅寺川と川原川からの沖積土がデルタ地帯としてのびていたが、まだ北部は島として取り残されていた。志登と泊の間は満潮時には海面となり、干潮時には干潟となる状況が中世まで残っていた。北部には、縄文・弥生時代から人々が住んでいたが、水田耕作には恵まれた土地ではなかったが、漁業には適した土地であった。志登の支石墓は、弥生前期(板付 II)から中期にかけてのものであり、有柄磨製石鏃が出土している。石ヶ崎の甕棺墓もほぼ同時期のものである。また、旧糸島高女敷地内出土の板付 II 式の甕棺から細形銅剣 1 口出土している。

元岡遺跡群(弥生中期～)からは製鉄炉が密集する大規模な製鉄遺構や、大宝元年(701 年)の年号が書かれた木簡、珍しいヒョウタン形土器などが出土している。

Wiki「怡土城」概要

福岡県の西部、糸島市・福岡市の境をなす高祖山(標高 416m)の西斜面に築城された古代山城である。奈良時代の天平勝宝 8 年(756 年)から神護景雲 2 年(768 年)にかけて築城された中国式山城で、文献によれば吉備真備のち佐伯今毛人が築城を担当したことが知られる。これまで 1936 年(昭和 11 年)以降に発掘調査が実施されている。

城は高祖山の西斜面にたすき状に構築され、北西尾根線上・南西尾根線上に望楼跡が、西山裾に南北約 2Km の土塁線が遺存する。また城域からの出土遺物として、多数の瓦片・土器片・埴片などが検出されている。他の古代山城(朝鮮式山城・神籠石系山城)が飛鳥時代の天智天皇 2 年(663 年)の白村江の戦い頃の築城とされるのに対して奈良時代の築城である点で特色を示すほか、文献上で築城担当者・築城期間が明らかな点、他の古代山城のような朝鮮式山城でなく大陸系の中国式山城である点でも重要視される遺跡になる。

和鉄の道「[福岡 元岡製鉄遺跡群を訪ねて](#)」ではこの遺跡が紹介されている。九州大学の新キャンパスということもあり、綿密な調査が為され、調査報告も膨大なものとなっている。300 年辺りのことは見い出せていない。製鉄遺構が何時のものか、原料の鉄鉱石は何处で採れたかなどがわかればとも思う。精錬遺跡に関しては、質量分析が有効と考えている。

奴国

奴国の位置は、Wikipedia では、現在の福岡市付近、と書かれている。行政的には、糸島の東部も福岡市となっている。これからは、Wikipedia の福岡市付近はほぼ福岡市中心部と解釈する。奴国の位置としては、伊都

国に少し近いが、図 IX07 の香椎神宮が候補と考えている。

また、図 IX07 からは、那珂川と御笠川の河口部は水面か干潟と思われる。筥崎宮と住吉神社は共に筑前国一之宮としているが、両者ともこの部分にある。

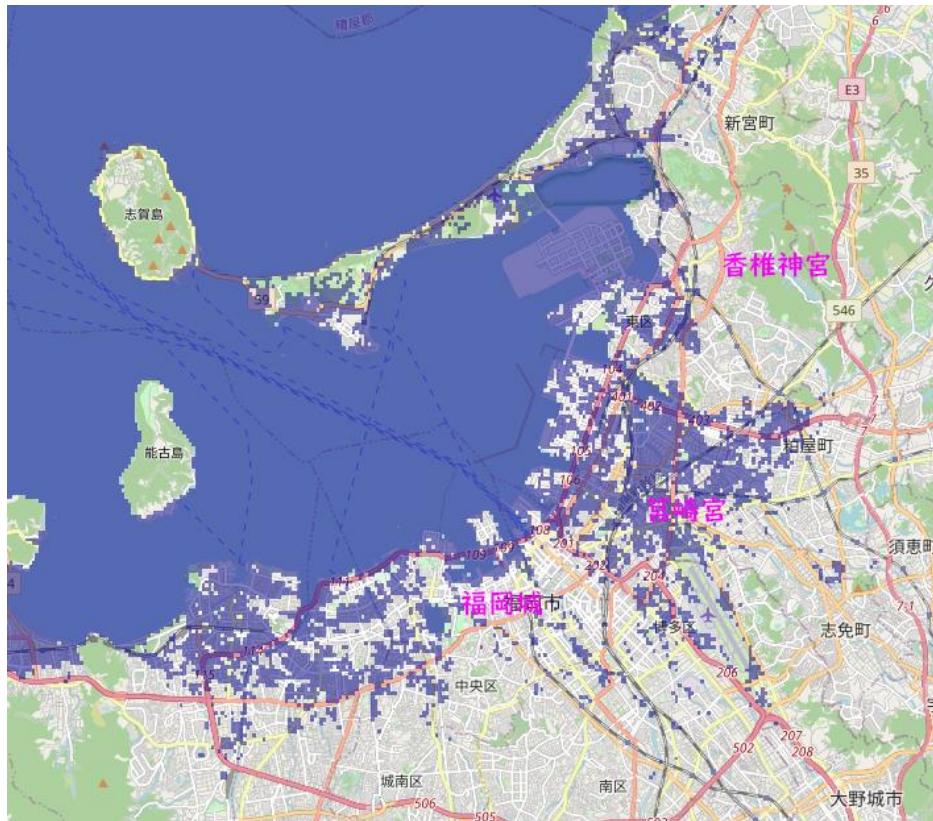


図 IX07 Flood Maps 福岡市

ここで、三国志に書かれた、各国の戸数が、伊都国は千戸で奴国は二万戸と書かれている。倭にとって重要な役職の大率が置かれ、帯方郡の郡使が留まるにところとしては、普通に考えれば、奴国のほうがふさわしい。

可能性の1つとしては、奴国は倭王に服従しているが、直属ではなかったということである。土着の豪族であるか、先に移住した部族かのどちら

かが考えられる。もう一つ考えられるは、伊都国と奴国が入れかわったということである。

後の時代に造られた鴻臚館は福岡市の海岸部にあるが、大宰府はかなり離れている。

Wikipedia「鴻臚館」

鴻臚館は平安時代に設置された外交および海外交易の施設である。前身として筑紫館や難波館が奈良時代以前から存在した。その名称は北齊からあった九寺のうちの外交施設、鴻臚寺、に由来し、唐の時代にその名称が日本に導入された。

筑紫の鴻臚館は現在の福岡県福岡市中央区城内にあった。福岡城敷地内に位置する。遺構が見つかっている唯一の鴻臚館である。筑紫(現在の福岡県西部)の外交施設の原型は魏志倭人伝の時代に遡るとされる。系島半島にあったとされる伊都国には、郡使の往来常に駐まる所なり、と記された外交施設が存在していた。ただし施設名や場所についての記録は残っていない。

Wikipedia「大宰府」

大宰府は、7世紀後半に、九州の筑前国に設置された地方行政機関。多くの史書では太宰府とも記され、おもに8世紀の大和朝廷内部で作られた

史書で大宰府と記されている。

大宰とは、地方行政上重要な地域に置かれ、数か国程度の広い地域を統治する役職で、いわば地方行政長官である。大宝律令以前には吉備大宰(天武天皇 8 年 (679 年))、周防総令(天武天皇 14 年 (685 年))、伊予総領(持統天皇 3 年(689 年))などあったが、大宝令の施行とともに廃止され、大宰の帥のみが残された。

続日本紀:文武天皇 4 年(700 年)10 月の条に直大壺石上朝臣麻呂を筑紫総領に、直広参小野朝臣毛野を大貳(次官)と為し、直広参波多朝臣牟後閉を周防総領と為し、とあるように総領とも呼ばれた。

大宝律令(701 年)によって、九州の大宰府は政府機関として確立したが、他の大宰は廃止され、一般的に大宰府と言えば九州のそれを指すと考えてよい。また、その想定範囲は、現在の太宰府市および筑紫野市に当たる。遺跡は国の特別史跡。

平城宮木簡には筑紫大宰、平城宮・長岡京木簡には大宰府と表記されている。都市名や菅原道真を祀る神社(太宰府天満宮)では太宰府という表記を用いる。唐名は、都督府であり、現在でも、地元においては、史跡を都府楼跡あるいは都督府古址などと呼称することが多い。

ここで、大宰府と福岡・大宰府と久留米の、もう少し詳しい、Flood Maps を掲げる。

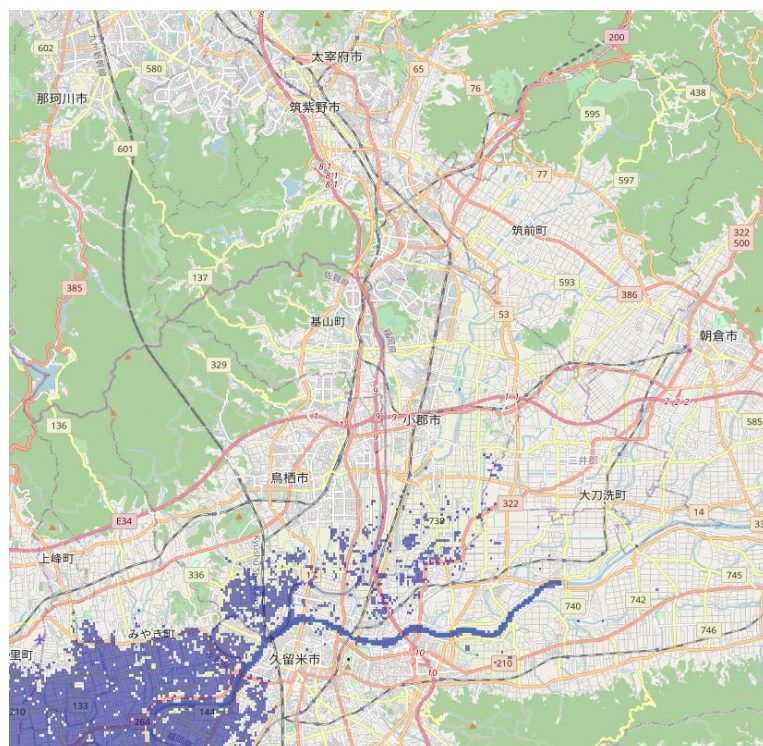
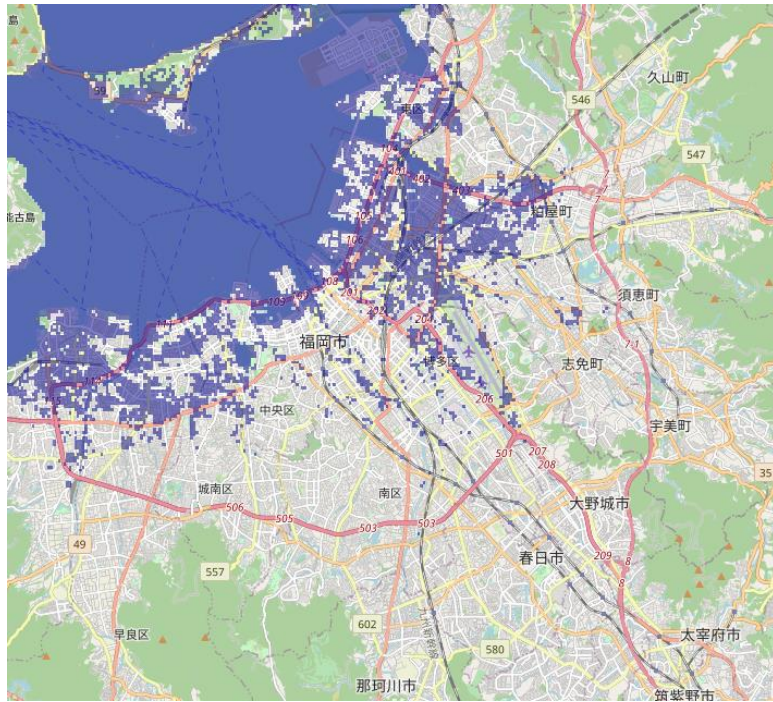


図 IX08 Flood Maps 大宰府と福岡(上) 図 IX09 Flood Maps 大宰府と久留米(下)

図 IX08 からは、那珂川と御笠川の河口部は現在よりかなり南にあり、湿地帯であったと思われる。御笠川は福岡空港の南端辺りまではかなりの川幅で、大野城市辺りまではそこそこの船の航行が可能ではなかったかと思われる。

不弥国

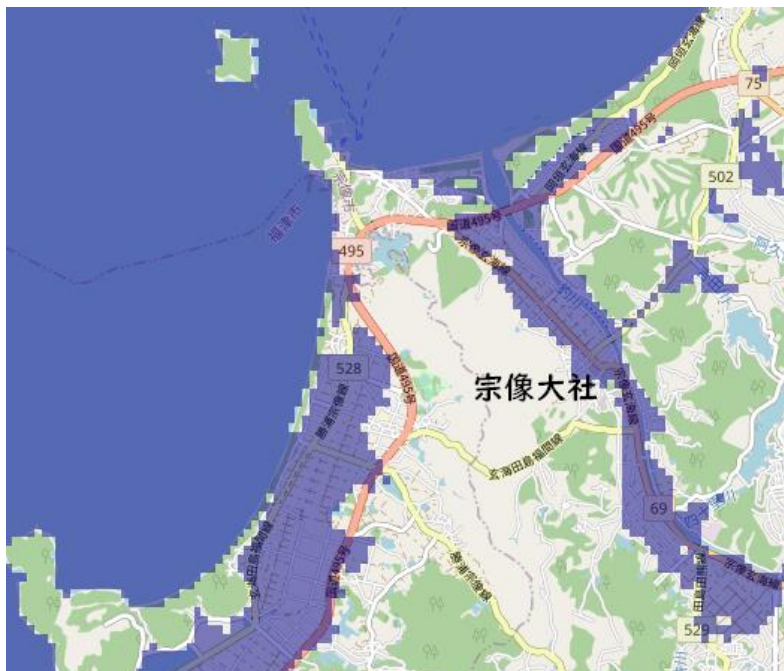


図 IX10 Flood Maps 宗像大社

図 IX10 は宗像大社付近のものである。縦細の半島状となっているのは、難波と似ている。半島になっている福津市(津屋崎)西部が島となっていて、不弥国とも考えられる。また、宗像市内を流れる釣川はかなり幅広くなっていて、汽水湖ともいえ、港とするに適している。紀推古部分の中ほど西

岸に宗像大社がある。また、海上に大島がある。

Wikipedia「大島（福岡県）」では

御嶽山頂には展望台と中津宮の奥宮にあたる御嶽神社がある。古代は中津宮の祭祀場であった。近くには織姫彦星の社があり、地元では日本の七夕伝説発祥の地とされる。港近くには、宗像三女神の次女、多岐津姫命を祀る宗像大社・中津宮がある。北側には沖ノ島の沖津宮を拝する沖津宮遙拝所がある。

投馬国

12.3. 節で遠賀川河口部は筑紫湖と名付けた湖水面で、洞海湾方面まで含めれば、河内湖に匹敵することをみた。また、不弥国から水行 20 日を考えれば、河口部では宗像に近すぎると考え、中間市か直方市を候補地とした。水行二十日の推定次第では、飯塚・田川辺りも考慮の対象となると考えている。

13.3. 節 宇佐神宮 で触れた、八幡宇佐宮託宣集には、筥崎宮の神託を引いて、「我か宇佐宮より穂浪大分宮は我本宮なり」とあり、筑前国穂波郡（現在の福岡県飯塚市）の大分八幡宮が宇佐神宮の本宮であり、筥崎宮の元宮である、は興味を引くものである。

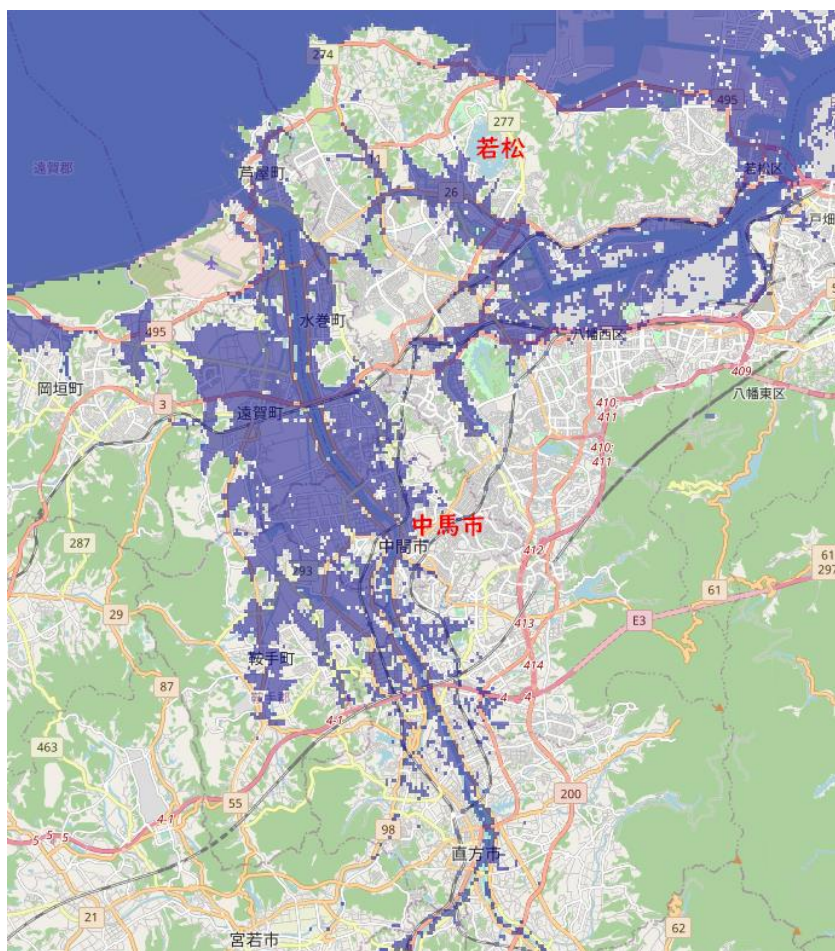


図 IXII Flood Maps 筑紫湖

Google Map で、北九州市・直方市・行橋市を含む範囲で、古墳と遺跡での検索を試みた。大雑把な印象では、古墳では行橋市辺りに多く、遺跡では直方市辺りが多い。また、両者の重なりはあまりない。直方辺りの可能性が高いと考えている。

遠賀川中流域は筑豊炭田として知られているが、石炭以外の鉱物、特に鉄、の産出についてはわからない。

また、炭田は他の地域では利用されてこなかった山を崩していくことに

なる。これは幾つかの遺跡が破壊された可能性があるということである。

ここまでの国々は、末盧国を含めて、全て玄界灘沿岸にある。古い港は、直接海岸ではなく、注ぎ込む川沿いにある。考えてみれば、外洋に面した古い都市は少ないと思う。鎌倉は数少ない例ではないか。

北九州市から福岡市にかけての J-Shis Map を掲げておく。

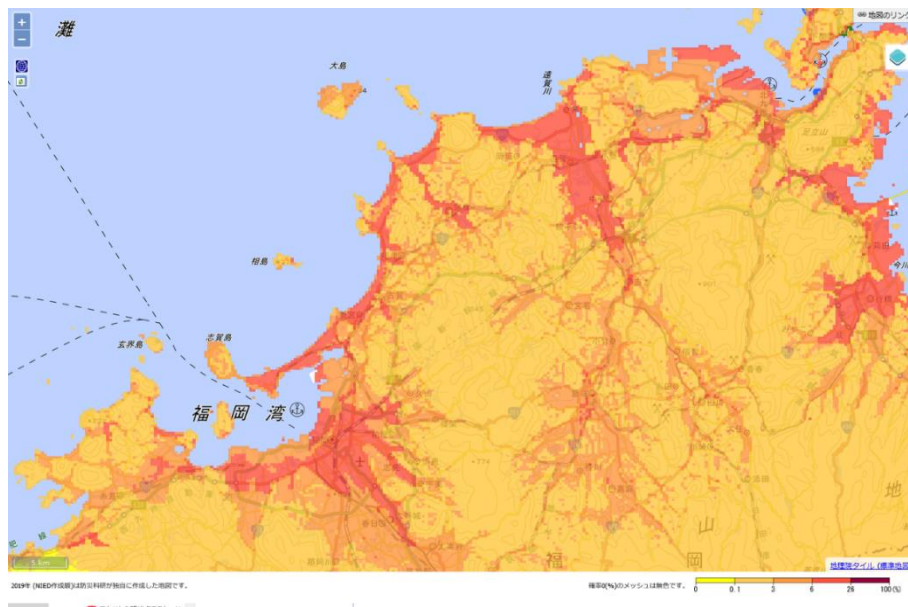


図 IX12 J-Shis Map 九州北部

邪馬台国

（投馬国から）水行十日陸行一月、戸数は七万で、官名が書かれている。

2.4. 節で、旅程の解釋で、連続説と放射説があることを述べた。記事を読

んだ限りでは、連続説のほうが自然であり、可能な限り自然と思える方を採用したい。

三国志の時代の邪馬台国(女王国に都)の位置については、遠賀川・山国川流域か筑後川・山国川流域のどちらかと考えたが、どちらかは決められなかった。この間に、前者を経て、後者に移ったと考えている。折衷案的ではあるが、遠賀川上流域・山国川流域から筑後川上流域・山国川流域を征服中としておく。戸数七万ということからは、筑後川上流域・山国川流域、現在の朝倉市・うきは市・日田市など、の可能性が高いと思っているが、この地域は、奴国の福岡からは南下して筑後川を遡るほうが自然である。

ここで、三国志に書かれている、女王国以北に 21 カ国について考えてみる。三国志の烏丸鮮卑東夷傳では馬韓の 50 余国と辰韓・弁辰 24 カ国と同様に全ての国名を挙げている。この 21 カ国のリストの最後が奴国となっている。伊都国の次に書かれている奴国とは共に女王国に属していることから、同じ国と考える。邪馬台国は筑後川上流域・山国川流域にあるとすれば、21 カ国は遠賀川上流域と筑後川中下流域(福岡県の南部)に位置すると考えられる。

また、女王国の南に狗奴国があり、男子の王であり、官に狗古智卑狗が

あり、女王国に属しないと書かれている。筑後川下流域はこの狗奴国が支配していたとすれば、上の遠回りの理由にはなる。

久留米にある高良神社の神階が従一位で、出雲に対するとされる熊野大社(松江)の正二位より高いことは、上の裏付けとなるかもしれない。

18.2. 壹与(伊予)・台与(豊)

これまで、倭の女王は、卑弥呼→台与(壹與)→伊予(臺與) と、漠然と想ってきたが、国産みの国々を考えているうちに、もう少し考察する必要を感じた。今更の感はあるが、定説(通説、一定の説)を見ていこう。

コトバンク「壹与」

ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典の解説

3世紀半ば頃の倭の女王。史料によって臺与とも記されている。魏志倭人伝には、邪馬台国の卑弥呼の死後、男王が継いだか、国中が服従せず内乱が続いたため、卑弥呼の宗女(一族の娘)で13歳になる壹与が擁立され、ようやく混乱が収まったと記載されている。壹与は中国の魏に使いを送り、魏滅亡後も西晋と外交関係をもち、武帝の泰始 2(266)年に遣使した記録が残されている。

日本大百科全書(ニッポニカ)の解説

生没年不詳。魏志倭人伝にみえる弥生文化後期の倭の女王。臺与ともみえる。倭の女王卑弥呼が3世紀の中ごろに死ぬと、男王がたったが、国中は服さず、内乱に発展した。そのような情勢のなかで、卑弥呼と同族の女でシャーマンの性向をもった年 13 になる壹与が擁立されて倭王となり、

内乱は収まったという。魏志倭人伝によれば、その直後に中国に朝貢していることがわかるが、それ以後の動静については明確にされていない。ただ日本書紀に引くところの晋書起居注にみえる倭女王が壹与とすれば266年までは在位していたことになる。

宗女に関しては、「[レファレンス協同データベース](#)」では、

大漢和辞典巻3 修訂版 p.960 によると、以下のような意味です。

ソウヂョ：同宗(一族・同姓・姓)の女、姪、一族の女、一族の世継ぎの娘と書かれている、

Wikipedia「台与」では、

臺與(トヨあるいはイヨ)は、日本の弥生時代3世紀に三国志魏志倭人伝中の邪馬台国を都とした倭の女王卑弥呼の宗女にして、卑弥呼の跡を13歳で継いだとされる女性である。魏志倭人伝中では壹與であるが、後代の書である梁書倭国伝・北史倭国伝では臺與と記述されている。

発音に関する議論：臺與をトヨと読むのが通説となっているが、これには議論がある。

◎ 臺の文字は中国の時代ごとにより、また地方ごとにより異なる。昔は də と表現していた時もあった。ト・ドの音韻の音節があるとすればこれに該当する。但し一般にはダが主流であり、隋の時代にダイに変化し、それが

そのまま今の日本の発音になり、中国ではその後にタイと変化していった。

◎ 台であれば、トと読めるということに異論は無いようである。しかし、臺と台は異なる文字である。

◎ 臺をトと読む根拠は、例えば藤堂明保 国語音韻論に、魏志倭人伝で、ヤマトを邪馬臺と書いてあるのは有名な事実である、と記載されていることに求められているが、これはすなわち邪馬臺=ヤマトという当時の通説に基づいた記述に過ぎないとする指摘がある。もしこの意見が妥当なら、漢和辞典の記載を根拠に、邪馬臺はヤマトと読める、臺與はトヨと読める、と言ったところで、大元にある通説の同義反復に過ぎないことになるが、臺の発音に関する中国語音韻論による議論はこの意見とは無関係である。また、そもそも魏志倭人伝には邪馬臺とは書かれておらず、邪馬壹(=邪馬壹)と書かれており、前提からして誤っている。

◎ 邪馬臺(邪馬台)の発音をヤマドとする説がある。

人物比定

◎ 万幡豊秋津師比売説：卑弥呼を天照大神に比定する場合の説。万幡豊秋津師比売は高御産巢日神の娘。の息子天忍穗耳命と結婚し、天火明命と邇邇芸命の母となった。天照大神の極めて近い親族で名前の中にトヨの文字がある彼女を臺與に比定する説で、安本美典が新版・卑弥呼の謎(講談社現代新書)で述べている。彼女は天照大神が主祭神である伊勢神宮の内宮

の相殿神の一人であり、安本はそれをこの説の根拠のひとつとしている。

◎ 天豊姫命説：桂川光和が唱える説。尾張氏、海部氏の祖彦火明、七世孫建諸隅命の子、天豊姫を臺與とする説。この人の二世代前に卑弥呼と思われる、日女命(宇那比姫)がある。

◎ 豊玉姫命説：石原洋三郎の説。13歳の台与が登場した際、卑弥呼は少なくとも、70歳以上で没したと考えられ、その年齢差は60才以上と考えられる。梁書倭国伝・北史倭国伝によれば、正始年間240-249、卑弥呼が死に、更に男王が立つが国中が服さず、更に互いに誅殺しあう。また卑弥呼の宗女である台与が立ち王となる。その後、また男王が立つ。』とあり、台与は短命？かもしれない。豊玉姫命は、天照大御神の曾孫である山幸彦と結婚をしているが、ウガヤフキアエズノミコトを出産した後、山幸彦のもとを去っている。

◎ 豊鍬入姫命説：崇神天皇の皇女である豊鍬入姫命に比定する説。天皇の命で天照大神を祭った初代斎宮が臺與に当たるという説であり、この説の場合は卑弥呼を倭迹迹日百襲媛命と比定することが前提だが、卑弥呼を倭迹迹日百襲媛命に比定する説は箸墓古墳の研究などから勢いを増している。

◎ 豊姫説：神功皇后の妹の豊姫に比定する説。肥前国風土記の神名帳頭注に、人皇卅代欽明天皇の卅五年 564 甲申、肥前國佐嘉郡、與止姫神鎮座。一名豊姫。とあり、與止日女神社の祭神。

- ◎ 二人の天照大神説： 日本神話の天の岩戸伝説の前後の天照大神は別の人物であり、それぞれ卑弥呼と台与である、という説。この説を唱える者は、卑弥呼没年前後1月の皆既日食によって岩戸隠れの神話を説明しようとする人が多い。
- ◎ 二人の神功皇后説： 直接に明示された説ではないが、日本書紀は神功皇后の在位期間を、わざわざ卑弥呼と台与の両方を含む年代に設定しており、日本書紀の編纂に携わった人々は卑弥呼も台与どちらも神功皇后のことだと考えていたと推定できる。

三国志では壹與、梁書では臺與と書かれている。すでにとりあげた正史の記事を再掲する。壹與・臺與の現れるのは、三国志・梁書・北史の3書である。

三国志の記事は

卑彌呼以死 大作塚，徑百餘步 徇葬者奴婢百餘人 更立男王 國中不服 更相誅殺 當時殺千餘人 復立卑彌呼宗女壹與 年十三爲王 國中遂定 政等以檄告諭壹與 壹與遣倭大夫率善中郎將掖邪狗等二十人送政等還 因詣台 獻上男女生口三十人 貢白珠五千 孔青大句珠二枚，異文雜錦二十匹

で、梁書の記事は

正始中 卑彌呼死 更立男王 國中不服 更相誅殺 復立卑彌呼宗女臺與爲王 其後復立男王 並受中國爵命 晉安帝時 有倭王贊 贊死 立弟彌 彌死 立子

濟 濟死 立子興 興死 立弟武 齊建元中 除武持節督倭新羅任那伽羅秦韓
慕韓六國諸軍事鎮東大將軍 高祖即位 進武號征東將軍

である。北史は

正始中 卑彌呼死 更立男王 國中不服 更相誅殺 復立卑彌呼宗女台與爲王
其後復立男王 並受中國爵命 江左曆晉 宋 齊 梁 朝聘不絕

で、爵命 まで、すなわち、臺與に関する部分は全く同じである。

この2つの記事では、壹與と臺與は同じように書かれている。したがって、両者は同じ人物を示していると考えるのが自然であり、問題はないが、少し心残りである。心残りの主なものは、訓みの異なる壹(yī)と臺(tai)を同じとしてよいかということであり、さらには、どうして異なる字がつかわれているかということである。

後漢書から梁書までの、作者と成立年、または、作者の生存期間を見る。

後漢書 432 年以降(南宋時代)、范曄 398-445

三国志 280 年以降(西晋)、陳寿 233-297

晋書 房玄齡・李延寿 648

宋書 沈約 441-513

梁書 姚察・姚思廉 629

三国志と梁書では 400 年程の差がある。模写におけるミスとすれば、模写の履歴がわからない以上、書かれた時期が古い三国志のほうがミスの可

能性が高いとするのが自然であろう。ここで、寺の音読みはジであるが、韓国ではサア中国ではスウである。遠いほど古い音が残っているとすれば、寺の音は、ジ→サア→スウと変わったことになる。

この問題はこれ以上手の付けようがないので、発想を変えて、壹與と臺與は別人と考えたら、どうなるかを考えてみる。根拠としては弱いですが、梁書の基となった使者との聴取記録で、大筋は三国志と同じであるが、使者の答えた女王の名前が異なっていて、これを採用した。

この場合、「卑弥呼と壹与の事跡が神功皇后紀となり、神格的部分と九州への移住が天照大御神となった」作業仮説 III は、例えば、「卑弥呼と壹与・台与の事跡が神功皇后紀となり、神格的部分が天照大御神となった」とするような修正が必要となる。

倭王の系譜は、卑弥呼→男王→伊予→台与、と修正することになる。

これに応じて、邪馬台国の所在地などの倭の東遷に関する今までのイメージや考察の結果を修正できるかがどうかである。

まず、三国志時代の邪馬台国であるが、菊池川・大野川辺りとしてきたが、筑後川・山国川辺りに変える。それでも、女王國以北に 21 カ国の余地は十分であると考ええる。なお、両川の河口付近には、夫々に、高良大社

と宇佐神宮(八幡大菩薩宇佐宮・比売神社)がある。ここまでが筑紫国あったと考える。この時点では、国東半島は、まさに、国の先にあったことになる。

西の方、現在の長崎県、の状況はわからない。長崎から熊本にかけては肥の国(肥前・肥後)が定説と思われ、異論はない。肥の国→火の国→火山であること、また隋書に火山としての阿蘇山が書かれていることから、阿蘇山を連想したいが、肥の国にはもう一つ有名な火山雲仙がある。

「雲仙岳と歴史・伝承① - 環境省」

●雲仙岳の立地と山容～縄文時代から古代～

雲仙岳そびえる島原半島は、西は外洋の東シナ海に面し、東は九州各方面へのアクセスルートである有明海に面した立地、そして三方を海に囲まれて高さ以上に立派に見える急峻な山容を背景に、古来、様々な海外文化がいち早く到来し、花開きました。島原半島は、国内でも最も早く(縄文晩期)稲作が大陸から導入された地域のひとつとされ、それを示す原山遺跡(農村公園)や山ノ寺遺跡等があります。仏教も同じく大陸伝来ですが、名高い僧・行基によって大宝元年(701年)、温泉山満明寺が雲仙地獄のほとりに開かれ、天皇の勅願所として、その約100年後に開山された比叡山・高野山とともに天下の三山と称されました。また、中国から日本に渡来する船にとっては、一番初めに見える高い山として渡海目標とされ、日

本山とも呼ばれました。この満明寺の沿革を記した温泉山縁起には、古事記・日本書紀に登場する天孫降臨にまつわる興味深い伝承が記されています。天孫降臨とは、天照大神の孫(天孫)の瓊瓊杵尊が天から地へ降臨したという神話で、降臨地としては日向国(宮崎県)の高千穂峡や高千穂峰が有力視されていますが、上記の伝承では瓊瓊杵尊は島原半島にて誕生し、その後に加無之呂(神代、当時の半島の中心地)から八代を経て日向国に向かった、というのです。他方、その八代の妙見宮(八代神社)には、古代に中国東岸部の寧波(一説には朝鮮半島南西部の百済とも)から妙見神が亀蛇に乗って海を越えて渡来し、一時期滞在した、という伝承があり、天草西岸に妙見浦、島原半島には妙見岳という地名があります。天孫降臨が大陸の高度な技術をもった集団(神)の日本への渡来を表現しているとすれば、上記2つの伝承は、古代の渡来人集団が東シナ海→天草→島原半島→八代という海上ルーで渡ってきた大きな流れを、それぞれ異なる形で伝えているものと言えるでしょう。

と書かれている。環境省が何故このようは解説を開示しているか疑問に思ったが、国立公園は環境省の管轄ということのようである。

噴火に関して調べてみたが、火の山にふさわしいのは阿蘇山のようである。

遠賀川河口から周防灘・豊後水道を含む図が図 IX02 である。

神武天皇紀から推測される倭軍についておさらいしておこう。まず、近代以前の軍隊は陸軍と海軍から成っている。古代において、海軍とよべるのは、地中海沿岸の大帝国(都市国家連合)しか思い浮かばない。日本で陸軍とよべるのは武田軍団・織田信長の軍隊であろう。移住直後の倭軍は、現在の米国の海兵隊的なものと考えている。すなわち、船団を組んで遠征をし、交易や征服をするというものである。これを、水軍と呼ぶことにする。船をもちいない軍を、適切な名前が浮かばなかったので、単に軍とよぶことにする。後者は、内陸部の遠征を繰り返すことにより、整備されていったと考えている。陸軍が主力になるには、道路が整うことが必要である。

東遷の戦法(戦略)は、まず、船により、陸に面した島、または、半島に拠点を造り、支配地域を増やすことになる。

倭の征服前の状況は資料がないので、推測するしかない。基本的には在地豪族の連合体と言えるのではないか。土着豪族のほうに住み着いているという感じが出て良いのだが、これでは亡命部族の作る国が排除されてしまう。

筑紫湖(遠賀川河口)にあったと思われる投馬国からみれば、遠賀川上流地域とともに、山口県の西部も陸戦部隊による征討が可能である。前者の次の目標は、菊池川・大野川地帯で、後者の次は周防灘沿岸地帯となる。

周防灘を内海化するには国東半島の支配は重要である。この先は、豊後水道を南下することと、豊予海峡を渡り伊予の2方向が考えられる。景行天皇紀の日本武尊の(改)遠征地にあたる。図 VI04 の山口県の左先辺りに内日銅山跡があり、山口市の文字の上あたりに長登銅山跡がある。また、時代は合わないが、伊予には別子銅山がある。一方、遠賀川中流域は筑豊炭田である。

前に引用したコトバンク「岡水門・崗水門」では、福岡県北部、遠賀川河口付近の古地名、と書かれている。この根拠は確かめていない。遠賀川河口部は投馬国への入り口となる。図 VIII08 からは、河口付近からは、ほぼ島となっている若松区の西側である。この島を、若松島と呼ぶことにする。これは糸島のように、倭は根拠地としていたのかもしれない。三国志には現れないことから、この後、周防灘への進出に際して、建設されたと考えられる。

図 IX13 は関門海峡である。

神武天皇紀での行程にあらわれることから、若松島の東側も考えられる。ここは、洞海湾への入り口となる。

玄界灘沿岸を制圧した後の征服先として、山口県西部・大分県北部沿岸部・遠賀川上流は三国志・有明海沿岸(遠賀川下流)・四国西部を挙げた。最終的には、全て征服したことになる。これらの地域の攻略の記事があっ

てもいいと思うが、見た記憶はない。物語として伝えられるような戦闘がなかったということかもしれない。

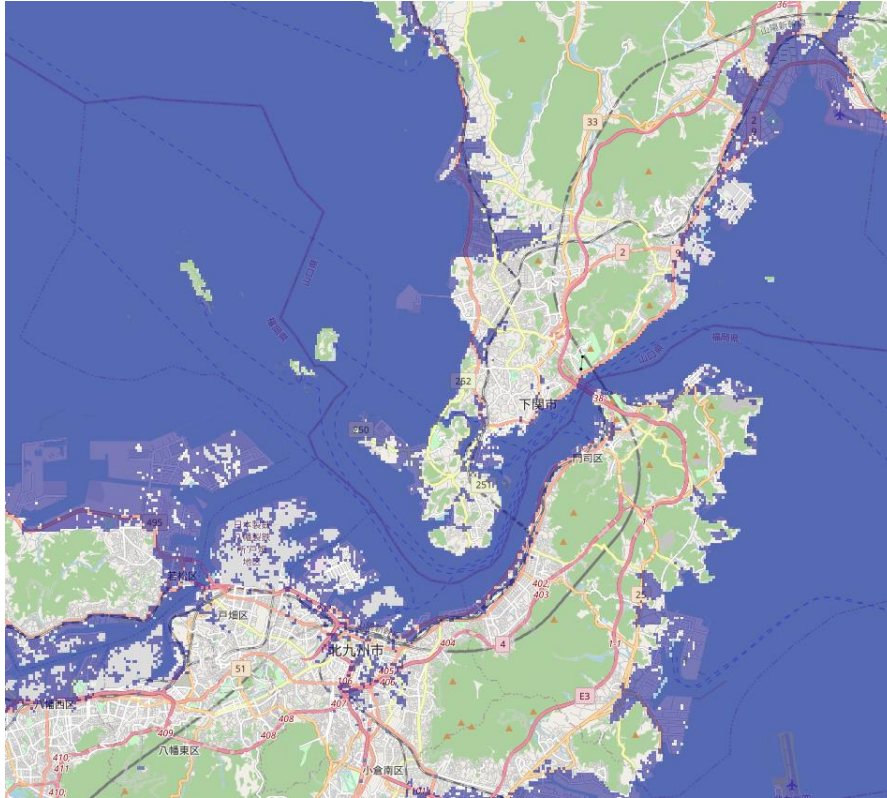


図 IX13 Flood Maps 関門海峡

ここで、有明海沿岸を考えてみる。図 IX14 の左上の方で、やや斜めに、3本の線が走っている。上のオレンジがE3 長崎自動車道、中の黒が長崎本線下のオレンジが国道34号線である。中央やや右の縦の黒線が九州新幹線である。

「[古代の佐賀平野と有明海](#)」古田史学会報 四十四号 でリンクされてい

る、筑紫平野生成過程図からは、図 IX14 の右上の地域と、さらに右側、朝倉市からうきは市、の部分も水面下であった可能性が考えられる。なお、2017 年の九州北部豪雨で大きな被害を受けた地域である。

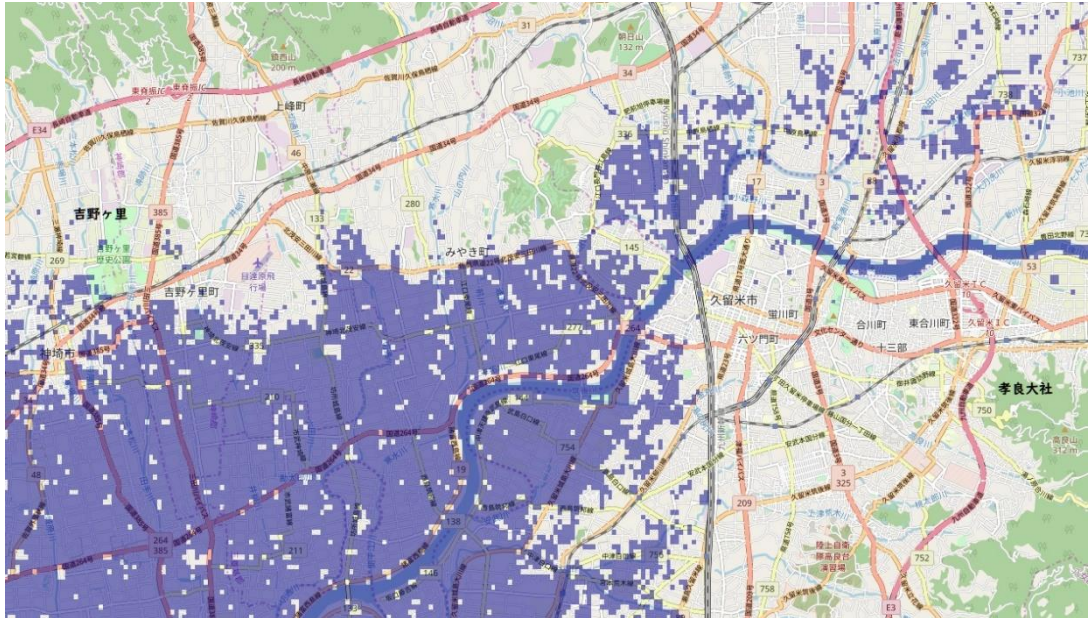


図 IX14 Flood Maps 高良神社・吉野ヶ里

青天の霹靂ともいえる従一位高良大社は、筑後川河口部にあり、近くには吉野ヶ里遺跡がある。

景行天皇紀では不知火海が現れる。戦闘せずに攻略したのか、記事とするような戦闘がなかったのでしょうか。

熊襲は九州で南に接する未征服国を指すのではないか。

18.3. 古事記の神武東征

古事記の文章は読みにくく避けてきた。わずかに、Wikipedia の引用を用いた程度であるが、面白い記事が幾つか見られた。近畿までの經由地程度ならば解るかもしれないと思い、古事記中巻神武天皇記から、地名の入っている文を見ていく。

神倭伊波禮毘古命(自伊下五字以音)與其伊呂兄五瀬命(伊呂二字以音)二柱 坐高千穗宮而議云 坐何地者 平聞看天下之政 猶思東行

神倭伊波禮毘古命と其伊呂兄五瀬命の 2 人は高千穗宮において議論し、そこに居る人に言った。天下の政を見るに、東行しようと思う。

ふりがな文庫「[“伊呂兄”の読み方と例文](#)」では、同母兄弟をイロセという、と書かれている。

Wikipedia で「五瀬命」で検索すると「彦五瀬命」の項目に飛び、

日本書紀・古事記によると、鸕鷀草葺不合尊と、海神の娘の玉依姫との間に生まれた長男である。弟に稻飯命・三毛入野命・神日本磐余彦尊(神武天皇)がいる。

彦五瀬命は弟たちとともに東征に従軍したが、浪速国の白肩津(あるいは孔舎衛坂)での長髓彦との交戦中に長髓彦の放った矢に当たった。彦五

瀬命は、我々は日の神の御子だから、日に向かって戦うのは良くない、廻り込んで日を背にして戦おう、と助言し、一行は南へ廻り込んだ。しかし紀国の男之水門に着いた所で、彦五瀬命の射られた傷が悪化した。この時に彦五瀬命が、賊に傷つけられて死ぬとは、と雄叫びしたので、その地は雄水門(男之水門)というとする。その後日本書紀によると紀国竈山で亡くなり、竈山に墓が築かれたという。ただし古事記では紀国男之水門で亡くなったとする。

と書かれている。

日本書紀では神日本磐余彦天皇となっていた漢風諡号が神倭伊波禮毘古命となっている。正史で日本が使われるのは唐書からである。

日本書紀では、諸兄及子等に謂ったとされているが、古事記では、其伊呂兄五瀬命と協議して決めたことになっている。東征開始前の(記年)記事は他にはない。

即自日向發 幸行筑紫 故到豐國宇沙之時 其土人 名宇沙都比古 宇沙都比賣(此十字以音)二人 . . .

直ちに日向を出発し筑紫に向かった。豊国の宇沙に到達したとき、その住人の宇沙都比古・宇沙都比賣の2人が . . .。

日本書紀では筑紫國菟狹(此云宇佐)と時有菟狹國造祖號曰菟狹津彦菟狹津媛である。また、菟狹の前に速吸之門を通っている。

自其地遷移而 於筑紫之岡田宮一年坐

その地よりさらに遷り、筑紫の岡田宮で1年過した。

日本書紀では、崗水門となっている。

Wikipedia「岡田宮」では

岡田宮は、福岡県北九州市八幡西区黒崎地区にある神社で、正式には岡田神社。古事記に神武天皇が東征の折に逗留したと記載されている古社で、天・地・人の三ノ宮を有する。毎年七月に岡田宮へ奉納する黒崎祇園山笠は北九州の風物詩として有名である。

とかかれ、八幡西区と遠賀川河口では、同じかどうか微妙である。

亦從其國上幸而 於阿岐國之多祁理宮 七年坐（自多下三字以音）

また、その国よりさらに上幸し、阿岐国の多祁理宮で7年過した。

陵墓探訪記「[多祁理宮（埃宮）](#)」では

多家神社が、神武東征で立ち寄った多祁理宮(古事記)、埃宮(日本書紀)の宮跡と言われています。現在も多家神社の別名として埃宮の名称が使わ

れています。(広島県安芸郡府中町宮の町3丁目)

この解説では、多祁理宮と埃宮は同じとしている。

從其國遷上幸而 於吉備之高嶋宮 八年坐

その国よりさらに上幸し、吉備の高嶋宮で8年過した。

遇于速吸門

速吸門にいたった。

Wikipedia「速吸門」では

速吸門は日本書紀・古事記に見える古代日本の地名。

- ・ 豊予海峡(速吸瀬戸)の古称(日本書紀)。
- ・ 吉備国の児島湾口の古称(古事記)。古くは早水の戸と呼ばれ、潮流が速く阿波の鳴戸にも劣らないほどとされた。現在は、児島が児島半島になったことや、児島湾締切堤防などにより、潮流は緩やかになっている。
- ・ 明石海峡の古称(古事記)。

と書かれている。

日本書紀の速吸之門と古事記の速吸門を、地名ではなく、潮の流れの速い海峡と理解すれば前者は豊予海峡としたが、後者は明石海峡が考えられる。鳴門海峡は候補とならないのか？

故從其國上行之時 經浪速之渡而 泊青雲之白肩津

其の国より上行し、浪速の渡しを経て、青雲の白肩津に泊った。

故號其地謂楯津 於今者云日下之蓼津也

それ故、その地を楯津と名付けた。今は日下の蓼津という。

Wikipedia「河内湖」から

古事記によると、神武東征で神武天皇は浪速の渡を越えて湾に進入し楯津(古事記編纂時の日下の蓼津)に上陸した。比定される東大阪市日下は生駒山脈の麓であり、当時はほぼ山麓まで海が迫っていたことがうかがえる。

浪速之渡と難波之碕とはイメージは異なるが、同じ所であろう。日本書紀では、徑至河内国草香邑青雲白肩之津となっていた。河内の草香邑は現在の東大阪市日下町という説を採用した。この後は、日本書紀では、龍田を攻めた後、茅渟山城水門を通り、紀伊国竈山となっている。

自南方 廻幸之時 到血沼海 南方より廻ろうとして、血沼海に到達した。

從其地廻幸 到紀國男之水門・・・故號其水門 謂男水門也

其の地を廻り、紀国男之水門に到達した。・・・にその水門を男水門でと名付けた。

Wikipedia「男之水門」で挙げられている比定地は、境内に男水門顕彰

碑が建立されている、和歌山県和歌山市小野町の水門吹上神社と、境内に雄水門顕彰碑が建立されている、大阪府泉南市男里の男神社境外摂社浜宮である。

陵即在紀國之竈山也

陵は紀国の竈山に在る。

故神倭伊波禮毘古命 從其地廻幸 到熊野村之時

故に、神倭伊波禮毘古命は其の地より廻幸し、熊野村に至ったとき、

到吉野河之河尻時

吉野河の河尻に至ったとき

自其地踏穿越 幸宇陀 故曰宇陀之穿也

其の地より踏穿越し、宇陀に幸した。故に宇陀の穿という。

自其地幸行 到忍坂大室之時

其の地より幸行し、忍坂大室に至ったとき

日本書紀では6年で橿原の地で即位したが、古事記では、吉備を出発するまでに16年かけている。(読み取れた)古事記の経路は、日向・高千穂宮 → 豊国・宇沙 → 筑紫・岡田宮(1年) → 阿岐国・多祁理宮(7年) → 吉備・高嶋宮(8年) → 速吸門 → 浪速之渡 → 青雲之白肩津 → 楯津(日下・蓼津) → 血沼海 → 紀国・男之水門 → 紀国・竈山 → 熊野村 → 吉野河・河尻 → 宇陀 → 忍坂大室となる。

18.4. 神武東征補考

前節で得た(古事記の)行程に日本書紀の行程を加えてみた。

記 日向・高千穂宮 → 豊国・宇沙 → 筑紫・岡田宮 (1 年)

(紀) (10 月) 速吸之門 筑紫国菟狹 筑紫国崗水門(11 月)

記 → 阿岐国・多祁理宮 (7 年) → 吉備・高嶋宮 (8 年)

(紀) 安芸国・埃宮(12 月) 吉備・高嶋宮(2 年目 3 月、3 年留まる)

記 → 速吸門 → 浪速之渡 → 青雲之白肩津

(紀) 難波之碕(5 年目 2 月) 青雲之白肩津(3 月) 龍田(4 月)

記 → 楯津(日下・蓼津) → 血沼海 → 紀国・男之水門

(紀) 軍至茅渟山城水門(5 月)

記 → 紀国・竈山 → 熊野村 → 吉野河・河尻 → 宇陀 → 忍坂大室

(紀) 紀伊國・竈山・名草邑 (6 月) 遂達于菟田下縣(9 月) (略)

12 章から 15 章で、東遷に関連すると思われる分野について調べた。これらを踏まえて神武東征を再度(重複を厭わず)見ていくことにする。

東征前

45 歳で東征宣言する前については、日本書紀の前文に書かれた次のみである。

神日本磐余彦天皇 諱彦火火出見 彦波□武□□草葺不合尊第四子 母曰玉依姫 海童之小女也 天皇生而明達 意□如也 年十五立爲太子 長而娶日向國吾田邑吾平津媛 爲妃 生手研耳命

神日本磐余彦天皇、諱は彦火火出見で、彦波□武□□草葺不合尊の第四子である。母は玉依姫で海童の小女である。天皇は生まれたときから明達意□如であった。十五歳で太子となり、後に、日向国吾田邑の吾平津媛を妃とし、手研耳命を生んだ。

諱が書かれているが、推古天皇紀までで諱が書かれているのは、仁賢天皇紀のみである。15歳で太子となったことについては、誰の太子か、また、初代天皇が太子となるのはおかしいのではないかと指摘した。

太子を経て天皇となった人物の記事が基になったと理解しておく。

また、日本書紀・神代下の最後の記事は次である。

波瀲武鸕鷀草葺不合尊 以其姨玉依姫爲妃 生五瀬命 次稻飯命 次三毛入野命 次神日本磐余尊 凡生四男 久之波瀲武鸕鷀草葺不合尊崩於西洲之宮 因葬日向吾平山上陵

波瀲武鸕鷀草葺不合尊は姨玉依姫を妃とし、五瀬命、稻飯命、三毛入野命、神日本磐余尊の 4 人を生んだ。久之波瀲武鸕鷀草葺不合尊は西洲之宮で崩御され、日向の吾平山上陵に葬った。

及年四十五歳 謂諸兄及子等曰・・・で東征が宣言され

天皇親帥諸皇子舟師東征 至速吸之門 で(神武)東征が始まる。

諸兄及子 はどの範囲か。倭王の宣言の対象としてふさわしいのか疑問が残る。神武天皇紀の出発状況は、ごく簡単に言えば、一族(一家)での夜逃げの感がする。少し脚色すれば、倭王位争いに敗れ、新天地を求めての旅立ちのようである。しかし、天皇親帥諸皇子舟師東征 からは、そのような感じはしない。

日本書紀では、筑紫国と日向国は現れるが、豊国はあらわれないことから、出発地は豊国とした。古事記では、五瀬命と議し、日向高千穂宮より出発したと書かれている。

若干のためらいがあったが立てた 作業仮説 V05 は応神天皇としているが、讃が朝貢した時期の倭王(天皇)とそれに続く天皇により東征が為されたと考える。天皇という呼称は倭の五王の時代にはなかったと思われるが、この時代の倭王という意味で天皇を用いることにする。

筑紫

次は筑紫國菟狹(宇佐)である。古事記では豊国宇沙となっている。

九州で神階の高い神社は、宇佐神宮(二品)、宗像神社(正二位)、高良神社(従一位)である。福岡を起点とすれば、宗像神社は北九州の玄界灘沿岸を制圧する前線基地、久留米の高良神社は南へ進み、有明海にでた地点となる(図 IX03、IX14)。宇佐神宮は豊後への起点となる。

東山道の南宮大社(正二位)・北陸道の気比神宮(従一位)、東海道の多度大社(正二位)・熱田神宮(正二位)・鹿島神宮(正一位)・香取神宮(正一位)などの神階も高い。これらの近くに三関のうち、不破関(関ヶ原町)、鈴鹿関(亀山市)、愛発関(敦賀市)がある。

また、奴国と女王国以北 21 カ国が 18.1. 節で考察したものならば、高良神社の位置は、これらを守る城砦の位置にあたる。対岸に位置する吉野ヶ里は肥に対する防御施設か、肥の国側の施設か。高階の神社がないことから、後者かもしれない。

菟狹の後は、吉備までは行程の記事のみである。行宮を造るほどの長期の戦闘がなかったのか、生産性が低く征服しなかったのか、既に倭国に属

していたかが考えられる。

筑紫國崗水門

Wikipedia「水門」では

水門は、河川または水路を横断する形で設けられる流水を制御するための構造物のうち河川堤防を分断する形で設置されるもの。河口付近を含む河川や運河、用水路、湖沼、貯水池、港湾などに設けられる。古くは水の門(ミナト)として港湾の意味も持ち、古事記や日本書紀では水門と書かれている。

コトバンク「岡水門・崗水門」

福岡県北部、遠賀川河口付近の古地名。神武、仲哀両天皇の寄港地と伝えられる古代の良港。塙舸のみなど。崗津。

ここで、「港湾の意味も持ち」は少し注意が必要な微妙な表現である。この引用文からは、水門をミナトと訓むことによると思われるが、万葉仮名などで確認できるのか。神武天皇紀では他に、茅渟山城水門がある。また、11.2節で取り上げた、速吸之門もある。感触として、単なる河口部ではなく、河口が汽水湖となっていて、海との水路が狭くなっている所としておこう。

古事記では、岡田宮となっている。Wikipedia「岡田宮」では、

岡田宮は、福岡県北九州市八幡西区黒崎地区にある神社で、正式には岡田神社。古事記に神武天皇が東征の折に逗留したと記載されている古社で、天・地・人の三ノ宮を有する。毎年七月に岡田宮へ奉納する黒崎祇園山笠は北九州の風物詩として有名である。

かつて岡地方(旧遠賀郡)を治めた熊族が洞海菊竹ノ浜(貞元)に祖先神を祀ったのが始まりとされ、そのためにこの地域一帯を熊手と号したといわれる。後、神武天皇が東征(神武東征)の途上に、この地に1年間逗留し八所神を祀ったとされ、神武東征にある岡田宮の候補地の一つである。仲哀天皇の時代には恭順した岡県主熊鰐の案内によって、神功皇后が岡田宮の八所神を奉祭したとの記事が日本書紀に載る。

と書かれている。

18.1 節で、投馬国は中間市か直方市、あるいは、飯塚・田川辺りを候補地と考えた(図 IX11 Flood Maps 筑紫湖)。投馬国は五万戸余りで、邪馬壹国の七万余戸に次ぐものである。

周防灘沿岸への勢力拡大の拠点としては、上記投馬国の候補地は内陸に寄り過ぎの感がある。洞海湾を含めた遠賀川河口(筑紫湖)辺りが適地であろう。

安芸

至安藝國 居于埃宮

単に居となっている。造宮の記載がなく埃宮と書かれていることから、埃宮は既存の宮ということであろうか。そうならば、安芸は既に制圧されていたことになる。また、移動手段が書かれていない。岡水門を経て、こまでは船を用いたと考える。

コトバンク「埃宮」精選版 日本国語大辞典の解説では

日本書紀にみえる神武天皇の行宮。神武天皇が九州から大和に向かう東征の際、現在の広島県安芸郡府中町に駐在したときの行宮と伝えられる。古事記では多祁理宮と記す。

府中町は広島市の東にあり、ここにある多家神社のホーム・ページでは埃宮と多家神社と並列で書かれている。南 5Km 程に宇品がある。図 IX15 で宇品は宇品島である。これは系島と似た状況であるが、かなり小さい。

日本書紀では、45 歳の 10 月に出発し、11 月に筑紫国・岡水門、12 月に安芸国・埃宮に至り、乙卯年 3 月に吉備国・高嶋宮に至った。文意から、乙卯年は 45 歳の翌年とした。日日も書かれているが、干支で書かれ、わ

からないので省略した。

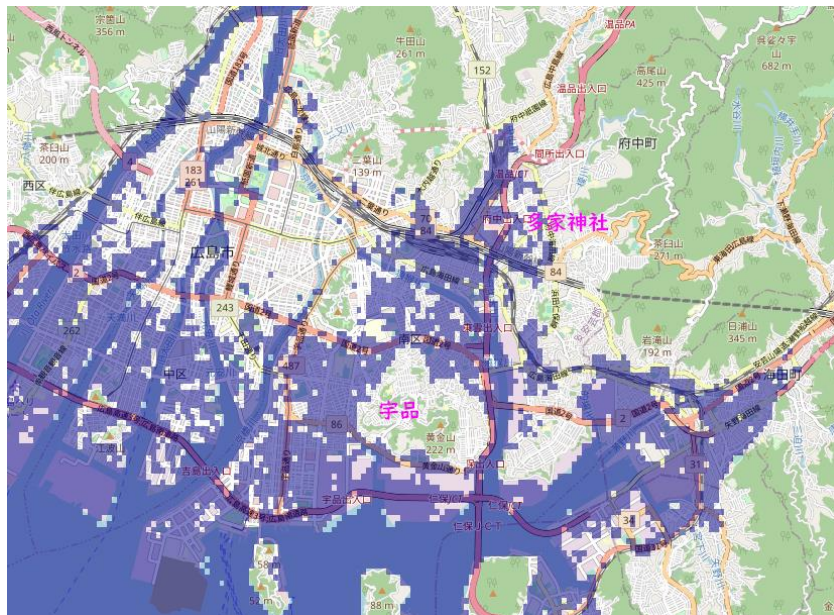


図 IX15 Flood Maps 宇品と多家神社

古事記では、筑紫・岡田宮に1年、阿岐国・多祁理宮に7年、吉備・高嶋宮に8年坐した。坐すは滞在することでありであろう。宮に滞在することとは遷宮であり、滞在したところが邪馬台国ということになる。

文武天皇4年に任命された総領は、筑紫・周防・吉備であるが、周防は経由地に入っていない。

9.4 節で考察した日本武尊と 17.2 節で考察した菟道稚郎子が思い浮かぶ。ここでは、菟道は宇治とされているが、宇品も考えられるのではないかと。菟は出雲を表し、菟道は出雲道ではないかとも考えた。さらに、日本

武尊の東国征伐は、安芸・出雲の征服ではなかったかとも考えた。

安芸の攻略は菟道稚郎子により為されたことも考えられる。

びんいん 埃：āi、宇品：yǔ pǐn、菟道：ú/tù dào

吉備

徙入吉備國 起行宮以居之 是曰高嶋宮 積三年間 脩舟楫

ここでは、徙入と書かれている。安芸で(陸)軍を整えたと思われる。神武天皇記では、吉備国に全6年中の3年間滞在したことになっている。また、古事記では秋に7年、吉備に8年滞在したことになっている。

神武天皇紀では、吉備は通過地のように書かれているが、東遷という見方からは、一応目的地であったのかもしれない。さらに、周辺を征服し、九州征服後の、ある意味、余剰兵力も集結したと思われる。このとき、主導権争い(王位・皇位争い)が起きたことも考えられる。吉備からの東遷は幾つかのルートで行われたと考える。まずは、瀬戸内(沿岸)ルート、山陽自動車道ルート、南海道ルート、中国自動車道・西国街道ルートを考えている。瀬戸内ルートと複数のルートの近畿到達を転戦ということにしたのではないか。

Wikipedia「吉備国」では

吉備国は、古代日本の地方国家である。現在の岡山県全域と広島県東部と香川県島嶼部および兵庫県西部(佐用郡の一部と赤穂市の一部など)にまたがり、筑紫、出雲、大和などと並ぶ有力な勢力の一つだった。

吉備は古代、畿内や出雲国と並んで勢力を持っていたといわれ、巨大古墳文化を有していた。また、優れた製鉄技術があり、それが強国となる原動力であったとされる。古事記中巻、孝靈天皇の段などに兵庫県の加古川以西が吉備であると捉えられる説話があり、加古川を国境としていた時期があると考えられている。

古墳時代、吉備地方の現在の岡山平野南部は内海となっていた(吉備穴海、もしくは吉備内海と呼ばれる)。

5世紀に雄略天皇は地域国家連合体であった国家をヤマト王権に臣従させて中央集権を進めるために、最大の地域政権の一つ吉備に対して反乱鎮圧の名目で屈服を迫った。吉備下道臣前津屋の乱(463年)と吉備上道臣田狹の乱(463年)の反乱鎮圧を成功させてヤマト王権の優位を決定づけた。さらに雄略の死の直後には、吉備稚媛(田狹の元妻で雄略の妃)と星川稚宮皇子(雄略と稚媛の息子)が反乱を起こしたため清寧天皇はこれを鎮圧し(479年)、またしても吉備の勢力を削減させている。

吉備国守、吉備大宰、吉備総領は、日本書紀、風土記、続日本紀に散見される官職で、吉備国分割の前後に設置されたとはいえる。職掌、管轄範囲、

存続期間は伝わらない。

吉備と筑紫・出雲・大和を同列に並べている。古代といっても、4 世紀・5 世紀を含むとすれば、200 年以上の期間となる。

本稿の立場からは、倭王朝と吉備との抗争は 2 種類が考えられる。1 つは、東遷の過程で吉備を征服するもので、この時の吉備の勢力は倭王家には属していない。もう 1 つは、近畿にできた大和または河内王朝と吉備王朝との抗争で、これは、倭王朝内部での(皇位)争いである。記紀で語られているのは後者であると考えている。

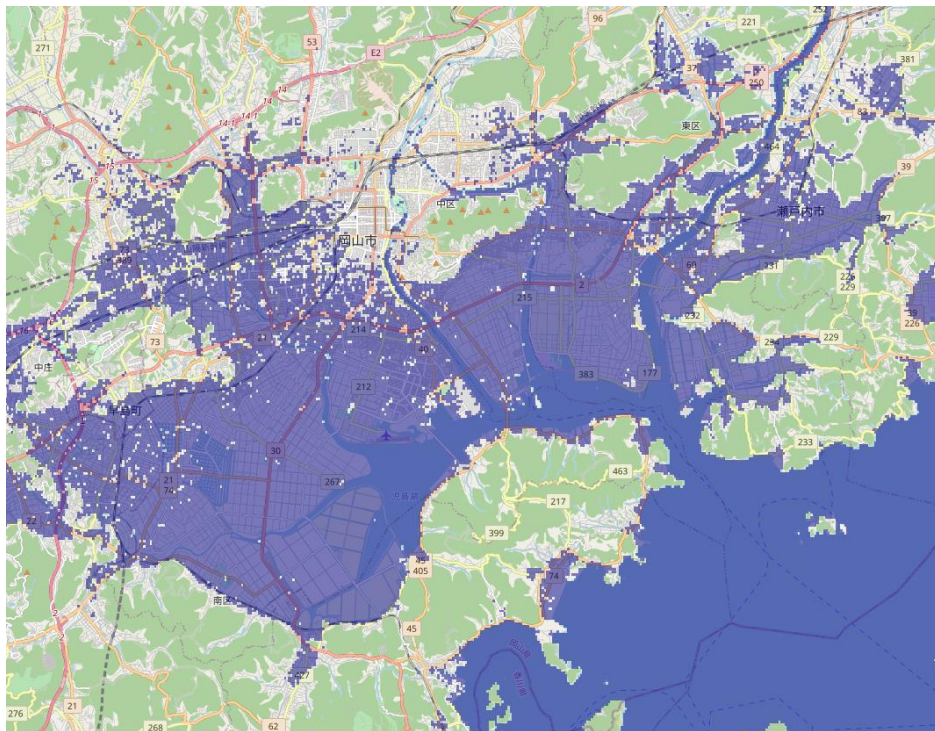


図 IXI6 Flood Maps 古代吉備・高島

神武天皇紀は九州の勢力(倭王、天皇家)が吉備から近畿を征服する話のダイジェストと考えている。

終了した Yahoo! ジオシティーズ「吉備の中海の変化をみる」に興味ある記事が書かれていた。仁徳天皇と黒日売の話と星川皇子の乱の話の後に次が書かれている。

当時のいろいろな記録から、平安時代の内海航路のコースとして考えられるのは、外海の播磨灘から牛窓を経て穴海に入り、福泊り(岡山市福泊)・平井湊(岡山市湊)・荒野荘・鹿田荘(岡山市平井・岡町・鹿田・浜野一帯)の沖合から藤戸海峡を抜けて水島灘の外海へ出ていったようであり、吉備の穴海もまだ海としての機能を十分持っていたといえる。

図 IX16 で、右端の中央辺りが牛窓である。また、岡山市内の地名は、現在の国道 2 号線(山陽道のバイパス)の内側である。

「吉備王国史」で、古代児島湾と古墳の分布図を見つけた。ここでは岡山県古墳名一覧も見ることができるが、現在は会員制のサイトになっているようである。

図 IX17 は吉備王国史にある吉備の古墳分布図である。海岸線は Flood Maps の図 IX16 とほぼ同じといえる。

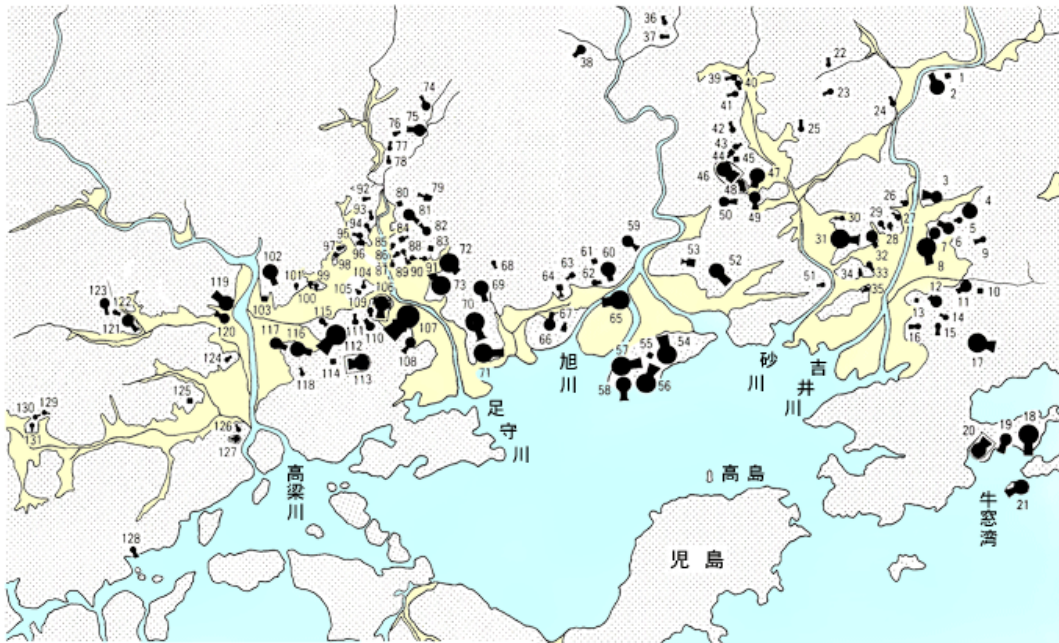


図 IX17 古代吉備

ここで、多数の古墳が残されているのは驚きである。河内・奈良に匹敵すると思われる。この図から、発掘(発見)された古墳の、数はともかく、密度は近畿を上回るのではないかとと思われる。ただし、近畿では、多くの古墳が破壊されたともいわれて、また、古墳を潰して造った例も見た記憶があるので、もっと多かったはずだが、密集度はどうであったか。

東遷以前の吉備・大和については解っていない。おそらく、今後も解ることは難しいと想っている。文献資料は期待できなく、考古学の成果に頼るしかない。ここで、特に前方後円墳の編年において、大和朝廷の影響に

より発生したということが前提になっている気がする。近畿以東に関してはそれでよいのかもしれないが、近畿以西に関しては、問題があると想っている。すなわち、東遷の過程で前方後円墳が誕生したのではないかということも考えられる。例えば、征服者としての権力を誇示するために巨大古墳を造った。

「[岡山県古代吉備文化財センター](#)のホーム・ページ」、[「岡山県立博物館」のホーム・ページ](#)」にも興味ある記事が掲載されている。

畿内

奈良・大阪については、河内湖や奈良湖を見てきた。奈良盆地や大阪市・東大阪市のかなりの部分は湖沼地で、人の住める状況ではなかったということで、征服の対象とはならなかった。また、生駒山地では負けるなど、陸上の戦闘では劣勢であった。

神武東征の近畿の部分は、難波之碕に到達した後、生駒山西麓(河内湖東岸)から暗峠越えと龍田越えで大和を目指したが敗れた。(船で)大阪湾を経て、和歌山に廻り、吉野から熊野を経て、宇陀から大和に入り、橿原宮で即位した。現在の大阪・奈良からみると、中央部分の攻略に失敗して、周辺を迂回して、裏から大和に侵入したことになる。

ここで、河内湖と大和川の付け替え、および、奈良湖の存在を知った。

Flood Maps で見ると、河内湖は琵琶湖の南湖と同じ程度の大きさである。大阪市と東大阪市では、上町台地より低い所は、湖沼地であったことになる。まさに、難波之碕状態で、先端が大阪城辺りで、付け根に部分に、四天王寺や住吉神社がある。

奈良湖は最大でも南湖程度で、5世紀辺りは、その半分から1/3程度ではなかったかと想っている。水が引くのと人が住めるのにはギャップがあり、上つ道、中つ道、下つ道の順に人が住めるようになったと考えている。国道24号線の天理以南から近鉄大阪線辺りはほぼ下つ道である。著名な唐子遺跡はこの道沿いにある。

奈良湖に流入する川は、大和川の上流部分と飛鳥川である。これが、流域の農業発展とともに干上がっていったのではないかと考える。

古代紀ノ川

茅渟山城水門は今の高槻と枚方の間を指すと考えたが、少し疑問も残った。山城から山背を連想したのではないか。淀川を少し遡上した可能性はなくもないと思うが、茅渟は大阪湾とするのが妥当であろう。河内から紀伊国に行く途中で水門の候補は、加太と地島の間海峡しか候補がない。海峡と思われるは速吸之門とあり、水がない。

国土交通省 近畿地方整備局 和歌山河川国道事務所

「[紀の川流域の地形＞和歌山平野の古地理変遷](#)」で紀ノ川河口部の古代地図が見つかったが、使いにくいので、Flood Maps の地図を用いる。

図 IX18 で、中央より少し右に赤線(国道 42 号)がある南北に細長い島が身に付く。この島の西は紀ノ川の河口になっていて、まさに水門である。島の北には和歌山城があり、南西の島には紀三井寺がある。

この図からは、古代においては、和歌山市あたりはそれほど魅力的なところではなかったのかもしれない。古い遺跡としては、根来寺は岩出市に、紀伊国分寺はさらにその右の紀の川市にある。岩出市から上流の紀の川流域の農業生産は、河内と奈良を併せたものよりも多かったのではないか。

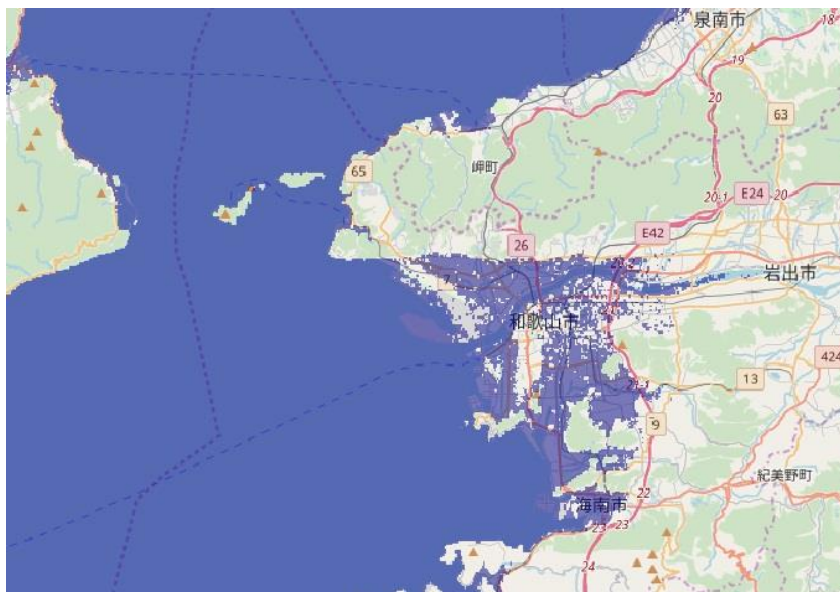


図 IX18 Flood Maps 和歌山

熊野関連の記事に関しては、違和感を抱いてきた。現在でも紀伊山地と

呼ばれる所で、訪れるのはかなり面倒である。

熊野に関連する記事は、紀ノ川流域の征服の話を置き替えたとすれば、
地理的には自然である。



図 IX19 Flood Maps 紀ノ川

18.5. 王朝について

日本史で王朝という用語を見たのは、騎馬民族征服王朝説の他では、河内王朝である。

Wikipedia「河内王朝」概説では、

4世紀末に河内に新政権(河内王朝)が成立したとする説の源流は、1949年発表の江上波夫らによる座談会「日本民族・文化の源流と日本国家の形成」(民族学研究、13巻3号)にあるとされる。その後、1960年代に直木孝次郎、上田正昭、岡田精司らが、この立場に立った研究を次々と発表した。河内王朝論は1960年代においては有力な説であったが、1980年代以降、学界では否定的な見解が多くなっている。

この政権の名称を最初に河内王朝と称したのは上田正昭であり、以降、河内王朝の名称が定着することとなった。東洋史学者の岡田英弘、日本史学者の塚口義信などが河内王朝の名称を用いている。難波王朝と称する研究者には考古学者の山根徳太郎がいる。直木孝次郎は、応神天皇を政権の初代とみなす立場から応神王朝という名称を用いていたが、後に王朝国家との混同を避けるため、河内政権という呼称を用いるようになっている。と書かれている。

王朝というものは、もともと、排他的なものと思っている。手の届く範囲は征服していく。並立できるのはお互いに相手を攻め滅ぼすだけの兵力をもたないときである。三国志では3王朝の鼎立である。

王朝の交替があったならば、王朝間での戦闘があったことになる。今のところ、このような戦闘は、日本では、壬申の乱と南北朝しか見いだせていない。屋敷を囲んで捕える程度は戦闘とは言えないと思われる。また、暗殺に近いものも見られる。

日本の王朝には排他的要素が希薄のように思える。閥閥的な感じも伺えられ、王朝と言ってよいのか疑問が残る。地域政権的な意味からは、朝廷が考えられるが、朝廷の一般的な用法とは異なる気がする。政権が無難な気がするが、感覚的に、古代史にはフィットしない。ということで、倭王朝の地方政権なども王朝とよぶことにする。

ここで、王朝と関連する用語について調べた。まず、大和朝廷で google 検索を行った。

コトバンク「大和朝廷」

ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典の解説：4～7世紀の日本の国家形成に際し、その中心となった中央組織。地理的には大和国(奈良県)が考えられるが、魏志倭人伝に見える邪馬台国の所在地や、記紀神話に見える

国家の東遷説も関連する。3世紀の日本について魏志倭人伝は 30 余国の小国家が分立していたことを記しているが、その後の文献で、それらがしだいに統合され 4 世紀末には大和、河内を中心とする地方に強力な統一国家が成立し、朝鮮にまで出兵するにいたった、とある。また宋書には、5 世紀に中国の宋と国交のあったことが記されている。これが大和国家とも呼ばれるもので、宋書に見える倭の五王は記紀に記された天皇とみられ、個々の比定には異論もあるが、倭王の武が雄略天皇である点はほぼ定説となっている。したがって、天皇を中心とする大和朝廷が 4 世紀末頃に近畿地方に成立していた可能性が高い。3 世紀の卑弥呼が都とした邪馬台国はヤマトとも読めるため、これを大和朝廷の起源とする説もあるが、それには所在地に九州説と大和説とがあり問題が多い。大和朝廷の成立については神武天皇を初代とする伝承が記紀に見えるが、実際には第 10 代の崇神天皇が初代の天皇であったとする説が有力である。崇神天皇は三輪に都し、大神神社と関係が深かったため、ミワ王朝と呼ぶ説もある。次に、世界的に大きな前方後円墳で知られる応神天皇、仁徳天皇を中心とするナニワ王朝が河内を中心として成立しており、これが宋書にいう倭の五王の時代にあたるものとみられる。さらに一部の学者には、北方アジアの遊牧民族が朝鮮半島を経て日本に上陸したという騎馬民族説をミワ王朝あるいはナニワ王朝にあてる者もいる。応神、仁徳王朝に次いで越前の三国から興った継体天皇が今日の皇室の起源をなしたとする説が有力である。崇神

王朝を古王朝，応神，仁徳王朝を中王朝，継体王朝以後を新王朝とも称する。大和朝廷は大和を中心として各地の諸豪族を宗教的，軍事的に圧倒し，しだいにその勢力範囲を拡大してゆき，大化改新を経て律令国家の成立を迎えた。

世界大百科事典 第2版の解説： 日本の古代，大和において天皇を頂点として政権が組織され，この政権によって国家が統治されたから，これを大和朝廷とよぶ。ただし，律令制の成立により藤原京，平城京に経営された政権は通常大和朝廷とはよばず，律令制以前の磯城・磐余地方にはじまり，飛鳥地方におよぶ各時代に営まれた政権，正確に言えば飛鳥浄御原宮あたりまでを大和朝廷と称するのが一般である。またこの期間中においても，大和における王権と朝廷の概念を区別する必要がある。

魏志倭人伝は 30 余国の小国家が分立していたことを記していることについて考える。三国志に書かれている国は、まず、対馬国より女王国までの 8 か国と、女王国以北の 21 カ国、および、狗奴國である。この他に、

女王國東渡海千餘里 復有國 皆倭種 又有侏儒國在其南 人長三四尺 去女王四千餘里 又有裸國 黑齒國復在其東南 船行一年可至 參問倭地 絕在 海中洲島之上 或絕或連 周旋可五千餘里

という記事がある。また、宋書の倭王武の上奏文で、

東征毛人五十五國 西服眾夷六十六國 渡平海北九十五國

と征服した国の数が書かれている。

Wikipediaでは、大和朝廷で検索すると、「ヤマト王権」にリンクされる。大和朝廷とヤマト王権では若干ニュアンスが異なると思われるが、この記事引用する。

ヤマト王権とは、3世紀から始まるとされる古墳時代に倭国の首長を中心として、いくつかの有力氏族が連合して成立した政治権力、政治組織。

大和をめぐっては、8世紀前半完成の古事記や日本書紀や、その他の7世紀以前の文献史料・金石文・木簡などでは、大和の漢字表記はなされておらず、倭として表記されている。三世紀には邪馬台国の記述が魏志倭人伝に登場する。その後701年の大宝律令施行により、国名は二文字とすることになって大倭となり、橘諸兄政権開始後間もなくの天平9年(737年)に、恭仁京遷都に先立って大養徳となったが、藤原仲麻呂権勢下の天平19年(747年)に大倭に戻り、そして天平宝字元年(757年)の後半頃に、大和へと変化していく。同年に施行された養老令から、広く大和表記がなされるようになったことから、7世紀以前の政治勢力を指す言葉として大和を使用することは適切ではないという見解がある。

Wikipedia「朝廷」

朝廷とは、漢字文化圏諸国における君主制下で官僚組織を伴った政府お

よび政権を指す。また、君主が政治執務を行う場所や建物。

Wikipedia「王朝」

王朝とは、歴史家による君主の系列の人工的な分類である。多くの場合は、血族や養子縁組による世襲君主制の君主の系列を分類するために用いられるが、奴隷王朝やマムルーク朝のように血縁とは無関係な君主の系列に用いられる場合もある。王朝名は、王朝に分類された君主の在位時から意識されている場合もあるが、ほとんどは後世の歴史家による命名である。

日本史において、一般的に王朝の分割による時代の分類は意識されておらず、また皇統以外の王権の存在も意識されていないため、王朝の呼称は王朝時代の例を除いて一般には用いられない。

各々の天皇の時代を推古朝等のように呼ぶ例や、皇統が断絶しないよう傍系から擁立した例(継体天皇、光仁天皇など)で仁徳朝天武朝と言及されることがあるが、あまり一般的な用法とはなっていない。

徳川将軍家で8代将軍徳川吉宗が紀州徳川家から入ったり、応神天皇の五世孫として継体天皇が即位したりするのは、日本では同一王朝とみなされるが、西欧文化圏や中華文化圏の一般的な見方に拠れば王朝の交代とみなされる可能性がある。

Wikipedia「王権」

王権は、人々に君臨する王の権力、統治権のこと。

国家にはさまざまな定義があたえられるが、一般に、国家は、農耕など生産経済の発明に触発された歴史上の大変動に惹起されて創り出された社会集団であり、

一定の領域

そこに居住する人びと(民衆)

それを統治する主権者

の三要素を不可欠なものとして有する政治機構である。初期国家の主権者は多くの場合王であり、王は、ほとんどすべての民族社会において、国家の成立とともにその最高権力を保持する者として出現する。この王のもつ権力が王権である。

前に述べたように、正史に日本国が登場するのは(新・旧)唐書で、それ以前は倭(国)である。

倭国を統治する集団を倭王権とよぶことにする。倭王権は1つ、あるいは、複数の王朝からなる。倭王の居る所を邪馬台国とする。

倭王権の王朝に名前をつけてみよう。

朝鮮半島での邪馬台国の候補としては伽耶山周辺を第1候補と考えている。したがって、加耶王朝ということができるが、しっくりこない感じ

もする。

玄界灘沿岸は筑紫王朝か。邪馬台国は糸島から遠賀川上流に移った。間に遠賀川河口部にも考えられる。

次は豊王朝で大野川(菊池川)流域を想定している。

埃宮に居したことから、安芸王朝も考えるが、安芸は国産み神話に現れない。国産み神話に伊豫二名洲があることから、伊予王朝も考えられる。

次は吉備王朝である。

淡路王朝と阿波王朝も可能性がある。

河内王朝(生駒山西麓(河内飛鳥))

難波王朝・明日香王朝(大和朝廷)

各王朝には2つの形態が考えられる。1つは、倭王の居住する所、すなわち、倭王朝(邪馬台国)本家としての王朝である。もう1つは、倭王朝の主力が移った後の、残留部隊、あるいは地方政権としての分家的王朝である。

吉備王朝や河内王朝は両方の形態を採ったと考えている。必要ならば、本家的状態を前期、倭王の移住後の分家的状態を後期と呼ぶことにする。筑紫も同様であったかもしれない。磐井の乱の磐井氏がそうであったことが考えられる。

難波王朝は南海道ルートを採った後着部隊によるものと考えている。周

防・安芸にもあったかもしれない。隋使裴清のいう秦王国が気になっている。

東遷は計画的に行われたのではなく、王族または構成部族が五月雨式に行ったのではないか。

雄略から継体にかけて、これらが近畿に到達し、覇権争いを通じて大和朝廷が形成された。

倭の五王時代の倭王の系譜の再編と五王と天皇の比定を目指しているが、現状では、手の付けようがない。

18.6. 東遷追考

復習

東遷に関する作業仮説では、直接的なものは作業仮説 I14 である。

作業仮説 I14. 倭の五王の時代に倭の東遷が行われた。

また、根本的な疑問は次である。

疑問 IX01. 日本書紀では、呉の記事は有るのに、五王に触れていないのは何故か。

倭の五王については 10 章で扱った。五王の朝貢は晋の義熙九年 413 の讃から始まり、梁の天監元年 502 の武で終わっている。関連する作業仮説は以下のものである。

作業仮説 I01. (大)倭王の居住する所が邪馬台国である。

作業仮説 I09. 三国魏の終わり頃(3 世紀後半)には、女王の都 (すなわち邪馬台国)は菊池川・大野川辺りにあった。その後、豊の国が九州の最後の拠点となった。

作業仮説 I10. 神功皇后四十年は魏の正始元年で、西暦では 240 年である。元年は 201 年となる。

作業仮説 III. 卑弥呼と壹与の事跡が神功皇后紀となり、神格的部分が天照大御神となった。

作業仮説 II2. 応神天皇廿五年は百済の腆支王十六年で、420 年である。元年は 396 年となる。

作業仮説 II3. 倭の移住は正始八年 247 から泰始初年 276 の間に行なわれた。

作業仮説 IV01. 雄略天皇六年は 462 年であり、雄略天皇元年は 457 年である。

作業仮説 IV02. 武烈天皇四年は 502 年、元年は 499 年である。

作業仮説 IV03. 継体天皇十七年は 523 年、元年は 507 年である。

作業仮説 IV04. 雄略天皇は宋書の倭王 興 である。

作業仮説 IV05 讃は応神天皇である。

このうち、作業仮説 II2, IV02, IV03, IV05 は各天皇紀に書かれている百済王の崩御の記事から得たものである。また、作業仮説 IV01, IV04 は

雄略天皇六年 461 吳國遣使貢獻

の記事と、この年に朝貢した倭王が興であることによる。

作業仮説 I09 で、菊池川・大野川辺りは筑後川・山国川のほうかもしれないが、どちらにも決め手がない(図 IX02)。3 世紀後半から 4 世紀で、後

者から前者に移ったと考えている。

五王の記事の最後は、梁書の 天監元 502 進武號征東大將軍 で、正史の次の記事は、隋書の記事

開皇二十年 600 倭王姓阿每 字多利思北孤 號阿輩雞彌 遣使詣闕である。

神武東征は東遷のダイジェストを神武天皇記として、遠い昔に置いたものであると考えている。ここでは6年で成し遂げられている。これが可能であったか。古事記では吉備までで16年となっている。

短期間で近隣を征服した織田信長では、桶狭間の戦いが1560年で、稲葉山城の戦いが1567年で、石山合戦は1570年である。なお、新幹線の営業キロは、名古屋・新大阪は186.6Km、新大阪・小倉間は555.1Kmである。

漢風諡号に神が含まれている天皇は神武・崇神・応神の3天皇と摂政の神功皇后である。これに関して、天照大神＋神功皇后＝卑弥呼＋台与（＋壹与）と同様に 神武＝崇神＝応神 が言えるのではないかということは、既に触れてきた。これは、作業仮説とするには至っていないが、かなり有力であると思っている。

さらに、応神天皇はいたのか、神武天皇・崇神天皇と並び仮想ではない

かという疑問も呈したが、これは現状では何とも言えない。神武天皇・崇神天皇は仮想的に置かれたでよいと考える。応神天皇の場合は、仮想的であっても、倭王はいたと考えている。神功皇后と共に宇佐神宮の祭神となっている。

さらに、仁徳天皇にも疑問を呈した。

17.10 節で呉国の記事は、応神天皇 37 年 432、306、41 年、仁徳天皇 58 年、雄略天皇 6 年 462、10 年 466、12 年 468、14 年 470 である。雄略天皇 14 年の記事では、呉使が身狭村主青にともなって派遣されたことになっているが、正史の記事では確認できていない。少なくとも、東夷に関する列伝には書かれていない。

倭の五王の期間における中国への使節の派遣は、雄略天皇六年 461 の記事のみである。卑弥呼では神功皇后紀に 魏志云 で注釈的な記事があったが、応神天皇紀には倭の五王の名前の記述が無い。これは日本書紀の編纂者は触れていない、あるいは、触れたくなかったと判断せざるを得ない。触れたくなかったのは何故だろうか。今思いつくことは、五世紀に東遷が行われたことを隠したいということが考えられる。もう一つは、日本書紀編纂時の天皇と五王とは別王朝(別系統)ではなかったかということである。

3.3 節の課題 2 に対するイメージで、応神天皇の在位を 130 年程繰り上げるために、併存した王朝の王を 1 系列に統合することが行われたのではないかと考えた。現時点では、繰り上げには仁徳天皇紀のみで、王の在位期間を短縮することで、1 系列に統合したのではないかと考えている。

倭の移住

三国志に書かれた女王国への行程からは、邪馬壹国(倭王の都)は九州にあった。これより、著者の陳寿の没年の 297 年までに邪馬壹国は、投馬国より水行十日 陸行一月の所にあった。これが倭の移住の下限である。晋の成立は 265 年であるから、270 年ごろまでに移住が行われたとした。

正始八年 247 に到官した太守王頎到官に卑弥呼が窮状を訴える使いを送った。これに対し、塞曹掾史張政を派遣したところ、卑弥呼は死んでいて、政らは壹與に檄告諭した、という記事から、250 年頃までは朝鮮半島に居たと考えた。

これらより、250 年から 270 年の辺りで移住が行われたとすれば、移住後ただちに三国志に書かれた邪馬壹国に移ったことになる。これが可能となるのは先行部隊がある程度征服していることである。

これに関しては、素戔鳴尊が思い浮かぶ。一方、正史には、桓靈間 147-189 倭国大亂以降、卑弥呼が倭王となる前後に男王が立ったが国内が乱れ

たと書かれている。倭王の移住の前に、乱に敗れた氏族が移住していたと考える。

伊都国に大率が置かれたことについては、若干の違和感を抱いていた。現在想定している状況では、邪馬台国から見て、伊都国の位置は、奴国を含む女王国以北 21 カ国の反対側になるということである(図 IX02)。

大率は如刺史と説明されている。Wikipedia「刺史」では、中国に前漢から五代十国時代まで存在した官職名。当初は監察官であったが、後に州の長官となった。日本では国守の唐名として使われた、と書かれている。

倭(女)王の移住に先立ち、倭王の先行部隊が派遣されたと考える。伊都国はこの基地となり、統治の為大率が置かれたのではないかと考える。倭の九州征服とともに、邪馬台国は、遠賀川上流域、筑後川・山国川の線、あるいはさらに、菊池川・大野川辺りの何処かにあったと考えている。伊都国の重要性は減少して、岡水門や高良神社の地に重点が移っていったと考える。

東遷前

五王の最初の記事は、南史の 晉安帝時 396-418 有倭王贊遣使朝貢 である。この間は約 100 年強であり、玄界灘沿岸から支配地域を増やしていったと考える。

このとき、周防灘沿岸の帰属はわからない。熊襲と戦いながら、周防灘にも手を伸ばす 2 面作戦が可能となるだけの兵力が倭にあったかも問題となる。この時代が国東を「くにさき」と読む状況にあったと思われる。この時点では東征であったかもしれない。

図 IX01 では古事記と日本書紀で能われる古代の国の位置、IX02 は Flood Maps の周防灘周辺の図に、邪馬台国の位置を書き加えた。また、図 IX03 では、神武天皇紀に現れる地名と、国産み神話の地名、すなわち、図 VI01 と 13 章の序で掲げた V02' を併せたものである。

九州の玄界灘沿岸の攻略が終わった後の征服先としては、まず、遠賀川上流からの南下・東進が挙げられる。この結果として、熊襲(国)の征服が必要となる。また、国東半島を経て、日向に南下することと、伊予に渡るのとも挙げられる。さらに、有明海から八代海沿岸も挙げられる。他に、中国地方の西部、長門・周防も挙げられる。

本格的な熊襲征伐は景行天皇紀の景行天皇によるものであろう。これで、筑紫・豊・日向・肥の 4 国ができたことになる。

女王国への行程には筑紫は現れないので、この時代には筑紫という地名はなかったと考える。女王国以北の諸国はかなり近いかもしれない。日本

書紀で宇佐が筑紫国とあるように、初期の筑紫は国東までで、長門・周防の一部も含まれたことも考えられる。あるいは、日本列島の支配地全体を筑紫と呼んでいたのかもしれない。

女王が 壺与 → 台与 と替わったすれば、この順に地名が成立したとしたい。これは、豊の国の前に伊予を攻略したとすることである。安芸は日向・肥の後と考えている。

福岡(奴国)から南下するルートが浮かんでこなかったことが気になる。これは、神武東征で生駒山地を攻略できなかったように、熊襲が強く、海兵隊的な軍隊では正面攻撃は難しかったことと、有明海沿岸は、まだ、それ程の魅力が無かったことによると考えている。

図 VI01 の赤紫の地名、すなわち、国産みに挙げられていて神武東征に含まれていない地域の考察から何かが得られることが期待される。西から東に移る話を考えてみると、日本武尊と神功皇后の帰り道がある。前者は9.5節で、後者は9.8節で扱った。後者では、往きは問題がないのに、還りにトラブルが生じるのはと述べた。神功皇后紀のこの部分は文が難しく(漢字が読めず)理解を放棄していたところである。

13.3 節で神社の縁起による記事から、これらは東遷の痕跡の可能性が増したと想っている。

また、日本武尊の東国征伐は、九州から見た東国の話を 8 世紀での東国に差し替えたのではないかと考えた。さらに、日本の昔話で、大国主命と国曳き・国譲り、桃太郎伝説などがある。これらは、この時代の話がデフォルメされて伝えられたのではないかと想っている。

真野長者伝説もここに入れておく。

また、「風土記上・下」中村啓信監修、角川ソフィア文庫には、肥前・豊後・出雲・播磨・常陸と逸文が収録されている。Wikipedia「風土記」では、奈良時代初期の官撰の地誌。元明天皇の詔により各令制国の国庁が編纂し、主に漢文体で書かれた、とされ、正史に準ずるものと位置付けられる。記紀に書かれていないものが有るのか無いのかを見ていくのが第 1 歩と想っているが、当分手を付けられる状況ではない。

筑紫

11.2. 節で取り挙げたコトバンク「岡水門・崗水門」の他では、Wikipedia「遠賀」があり、

遠賀とは、日本の福岡県北東部にある地名。遠賀地方とも呼ばれる。範囲は中間市と遠賀郡(水巻町、遠賀町、岡垣町、芦屋町)の 4 町。

日本書紀にある岡県、崗之水門や、万葉集に詠まれた岡の水門などが由来と考えられ、その後奈良時代に、岡から乎加・塙餉・遠賀などと変化し、

さらに時代を経て詠み方がオカからオンガに変わった。

とされている。また、Wikipedia「岡田宮」では

岡田宮は、福岡県北九州市八幡西区黒崎地区にある神社で、正式には岡田神社。古事記に神武天皇が東征の折に逗留したと記載されている古社で、天・地・人の三ノ宮を有する。毎年七月に岡田宮へ奉納する黒崎祇園山笠は北九州の風物詩として有名である。

と書かれている

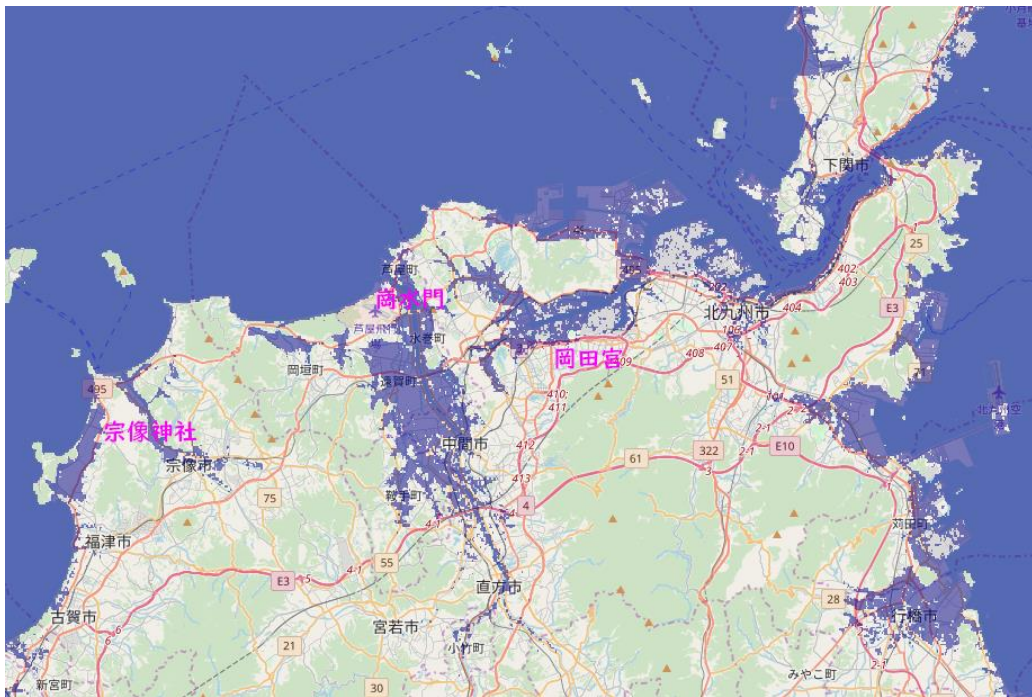


図 IX20 Flood Maps 北九州市

図 IX20 は、Flood Maps の北九州市を中心とした部分である。

上で見たように岡田宮(神社)が古事記で神武天皇が 1 年を過ごした岡田宮であったとして、日本書紀で神武天皇が立ちよった岡水門は遠賀川河

口ということである。東征の途中で立ちよるには、少し引き込んでいる気がするが、若松島は糸島と似た状況である。

周防灘方面にも水門とよんでもおかしくない所が2カ所ある。1つは、荻田港辺りで、もう1つは行橋市である。

中・南九州

中・南九州の征服は、殆どが熊襲の征服である。これについては、これまでに何回か触れてきた。まとまって書かれているのは景行天皇紀で、ここでは、景行天皇によるものと、日本武尊によるものとが書かれている。2人以上の倭王の話を1つに纏めたものと考えた。この他に、仲哀天皇紀では、熊襲より新羅を攻めるべきであるというお告げに逆らい、熊襲の征服をしようとして、神の怒りにふれ、崩じたことが書かれている。

日本書紀に書かれた順では

景行天皇 → 日本武尊 → 仲哀天皇

となるが、書かれた内容からは逆の

仲哀天皇 → 日本武尊 → 景行天皇

のほうが自然である。

仲哀天皇紀の記事は、故地を維持する派と南進派との抗争で物語っていると考える。

9.4. 節で日本武尊を扱った。この復習 + α をしておく。まず、遠征は西征と東征に分けて書かれている。西征は熊襲を撃った後、海路で倭に還る途中で、吉備の穴海で悪神を殺し、難波で柏濟の悪神を殺した。古事記では、同じく熊襲討伐還り道で、山神・河神・穴戸神が講和し参上したと書かれた後、出雲健誅殺の話が書かれている、ということである。

図 IX16 の児島湾は穴海と呼ぶにふさわしい。吉備地方は還り道に片付けられるものではないと思うが。また、何故還り道なのか。往きは問題が無かったのかという疑問も生じる。1つの素朴な答えは、往きは無かったということである。熊襲討伐の後、吉備や出雲を攻めたことになる。

伊予と長門・周防

9.4 節で、日本武尊の東征は、九州にあった邪馬台国から伊予・周防・岩見を攻略した話を、近畿から東を攻略する話に書き換えたのではないかと考えた。こう考えれば、九州と吉備の間が埋まることになる。壬申の乱で天武天皇が兵を整えた美濃は関ヶ原辺りであったことから、東海道が意味をもってくるのは、かなり後のことと思う。

置き替えとして思いつくものを挙げていこう。

まずは、伊吹山は大山ではないか。山の神の怒りにふれ病んだのは、出

雲と戦い負傷したとできる。大山周辺は鉱物資源に富むところであり、倭王朝としては支配したいところである。

伊勢神宮に替わるものは、神階が一品で、神武天皇も立ち寄ったとされている、宇佐神宮が挙げられる。

草薙剣の話の舞台としては、秋吉台のほうがふさわしい気がする。

弟橘媛が入水した浦賀水道に対しては、豊予海峡が挙げられるが、これでは、一度戻ってからになる。複数の遠征を一つにしたのかかもしれない。

熱田神宮に対しては、これといったものが思いつかない。中国地方西部にある神階の高い神社としては、大山祇神社が挙げられるが、今一つの気がする。探す範囲は、周防が主で、安芸・伊予辺りと思っている。

関東東北の国々は、記紀編纂時の東国を、啓蒙の為、並べたのではとも思われる。

Wikipedia「周防国」では、

古代には大島国造、周防国造、波久岐国造、都怒国造が設置された、と書かれている。

また、日本辞典「[都怒国造\(周防\)](#)」では

都怒国造は都怒国(現・山口県周南市都濃周辺)を支配したとされ、国造本紀(先代旧事本紀)によると仁徳天皇の時代、紀臣と同祖の都怒足尼の子である田鳥足尼を国造に定めたことに始まるとされる。田鳥足尼に関して

は嶋・鳥の混乱が見られるため、人名は特定できていないようだ。古事記によると、田鳥足尼は建内宿禰の子で木角宿禰の一族であるという。国造家は紀臣族と同祖で都奴臣の祖とされる都努氏で、都怒国は紀村と称されていた経緯などからも紀角臣と同系と見られている。山口県内最古である周南市の竹島御家老屋敷古墳や、下松市にあった宮ノ州古墳などは紀角宿禰の一族のものと考えられている。

日本辞典「[波久岐国造\(周防\)](#)」では

波久岐国造は波久岐国(現・山口県山口市と宇部市・防府市の一部)を支配したとされ、国造本紀(先代旧事本紀)によると崇神天皇(10代)の時代、阿岐国造と同祖の金波佐彦の孫である豊玉根命を国造に定めたことに始まるとされる。一説には阿波国造との混同とも言われており、関連の古墳や出土品が無いために実在したかどうか不明である。

日本辞典「[大島国造\(周防\)](#)」では

大島国造とは大島国(現・山口県大島郡周防大島町周辺)を支配した国造とされ、国造本紀(先代旧事本紀)によると成務天皇(13代)の時代に无邪志国造の祖・兄多毛比命の子である穴倭古命を国造に定めたことに始まるとされる。周防大島の正式名称は屋代島で、瀬戸内海では淡路島・小豆島に次ぎ3番目に大きい島であり、古くから海路の要所として知られる。平城宮の長屋王邸跡から大島郡を示す木簡が多く出土していることから皇族・長屋王の封戸が置かれた可能性が指摘されている。

仲哀天皇紀に書かれた角鹿や紀伊がこの辺りと考えられないか。

Wikipedia「都怒我阿羅斯等」では、

都怒我阿羅斯等(生没年不詳)は、日本書紀に伝わる古代朝鮮の人物。日本書紀では都怒我阿羅斯等、他文献では都怒賀阿羅斯止・都怒何阿羅志止・都奴加阿羅志等とも表記される。また日本書紀では別名を斯岐阿利叱智干岐とする。意富加羅国(大加耶/大加羅、現在の韓国南部)の王子で、地名敦賀の由来の人物といわれる。

日本書紀では垂仁天皇 2 年条の分注として 2 つの所伝が記載されている。1 つ目として崇神天皇の時、額に角の生えた都怒我阿羅斯等が船で穴門から出雲国を経て筍飯浦に来着したという。そしてこれが角鹿の語源であるとしている(角鹿からのちに敦賀に転訛)。また垂仁天皇の時の帰国の際、天皇は阿羅斯等に崇神天皇の諱(御間城天皇)のミマキを国名にするよう詔した(任那(弥摩那)の語源)。その時に阿羅斯等の下賜した赤絹を新羅が奪ったといい、これが新羅と任那の争いの始まりであるとする。

2 つ目の所伝では、阿羅斯等が国にある時、黄牛の代償として得た白石が美しい童女と化したため、阿羅斯等は合をしようとした。すると童女は阿羅斯等のもとを去って日本に行き、難波並びに豊国の国前郡の比売語曾社

の神になったという。

なお2つ目の所伝の関連伝承が、古事記の天之日矛(天日槍)・阿加流比売神説話や、摂津国風土記逸文(萬葉集註釈所引)に見える。

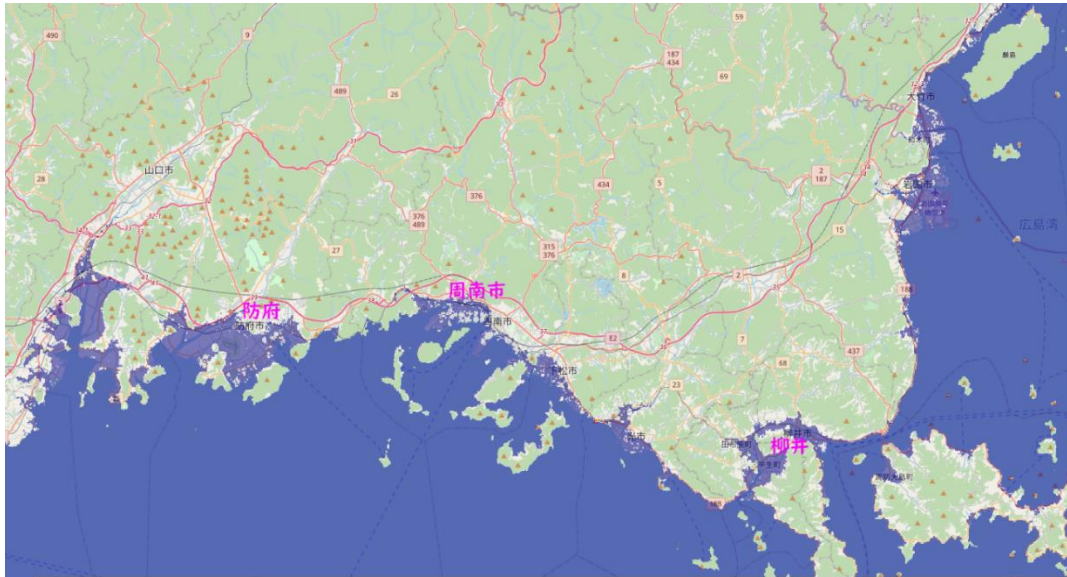


図 IX2I 防府と柳井

前に、蘇我のピンインが sū wǒ であることを指摘した。一方、周防は zhōu fang である。

周防と同時に、長門・伊予の征服も行われたはずである。Wikipedia「周防国」と日本辞典「都怒国造(周防)」を調べたのと同じことを行えば、何かは見つかるかもしれない。後者では、記紀以外の、すなわち、正史以外の情報に基づいていると思われる。これらを調べることは、現時点でも、そして今後も、筆者の能力を超えることである。また、神社の縁起なども対象とする必要もあるかとも考えている。

山陰道と南海道は、山陽道に比べて、平地が少ない。これから、大きな勢力はなく、征服も容易であったと思っている。この段階から次の安芸の段階で、統治機構の整備と、これに欠かせない、官僚の育成が始まり、吉備である程度完成したのではないかと考えている。

また、この時点で中国の王朝による爵位が有効であったことと、その政治形態に接することも意味があったと思っている。

安芸

大日本豊秋津洲を大日本・豊・秋津洲と分解してみる。このうち、秋津は安芸津ではないか。大日本は大和とすれば、大和・豊・安芸となり、倭王の居る邪馬台国と豊国と安芸国の総称と考えられる。周防辺りに津と呼んでもよい所が見つかれば、秋津を安芸・津ともできる。豊が入るのは何故かというのはわからない。

図 IX22 は、広島県「[瀬戸内海航路図](#)」で得たものである。現在の航路は右端中央から四国沿いにやや南下して西に向かうようである。古代においてはほぼ中央を東西に航行したと思われる。図 IX21 の flood Maps では、柳井市の半島状の部分は嶋になっていて、南端に回らずに航行できた可能性がある。九州から吉備・近畿に航行するとき、柳井は必ず通る所と

いえ、柳井市は津の有力な候補となり得る。

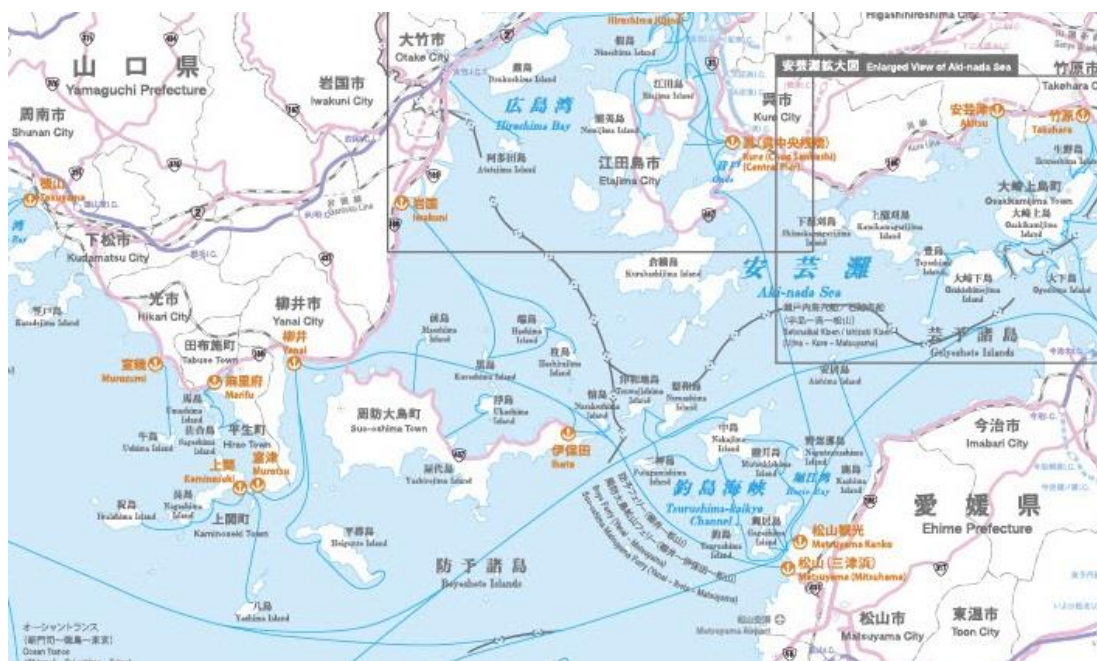


図 IX22 広島県航路図

安芸国・埃宮は現在の多家神社とされている。古事記では阿岐国・多禰理宮と書かれ、7年滞在したとされている。Flood Maps の図 IX15 では、多家神社は海岸にはあるが、島でも半島状でもない。この図からは、宇品のほうが倭の宮の位置としてはふさわしいと思われる。

埃宮の所在地とされている広島はこの航路からかなり北に位置している。埃宮に滞在してということは、安芸地方を征服することを目標としていたと考える。次の吉備には徙入し、脩舟楫したことから、水軍は戦闘能力を失ったと思われる。

宇品からは菟道稚郎子が連想される。菟は出雲を表すとすれば、菟道は出雲道となる。

吉備

吉備については、前節でかなりの程度に扱った。

出雲

出雲については 17 章で考察してなかった。神武天皇記から継体天皇紀までを「出雲」で検索してみた。ヒットした記事を 1 行にして抜き出した。
崇神天皇六十年七月 詔群臣曰 武日照命 從天將來神寶 藏于出雲大神宮
是欲見焉 則遣矢田部造遠祖武諸隅

で、かなり長い記事である(488 文字)。以下

垂仁天皇二年蘇那曷叱智請之 欲歸于國・・・經出雲國至於此間也

垂仁天皇七年七月 臣進言 臣聞 出雲國有勇士 曰野見宿禰 試召是人

垂仁天皇廿三年十月 時湯河板舉遠望鵠飛之方 追尋詣出雲而 捕獲

垂仁天皇廿六年八月 天皇勅物部十千根大連曰 屢遣使者於出雲國

垂仁天皇卅二年秋七月 則遣使者 喚上出雲國之土部壹佰人

仁徳天皇紀前文 而謂其屯田司出雲臣之祖淤宇宿禰曰

顯宗天皇紀前文 出雲者新墾

繼體天皇元年 次妃三尾角折君妹曰稚子媛 生大郎皇子 與出雲皇女

がヒットした。殆どの記事が垂仁天皇紀に集中している。戦闘の記事は無いようである。

日本書紀の神代は現状ではまともに読めないので、

Wikipedia「日本神話」の出雲神話では、

スサノオ(須佐之男)は出雲国に降り、八俣遠呂智を退治し、櫛名田比売と結婚する。スサノオの子孫である大穴牟遲神(大国主)は、八上比売と結ばれるが、それを妬んだ八十神に迫害される。難を逃れ、根之堅洲国でスサノオの試練を乗り越え、スサノオの娘である須勢理毘売命を娶って大国主神となる。その後、沼河比売や多紀理毘売命と結婚し、多くの御子神を生み、少名毘古那神や三輪の神と葦原中国の国づくりを始めた。

これらの説話は出雲国風土記には収録されていない。ただし、神名は共通するものが登場する。また、全国各地の風土記や神社、地方誌には、独自色の濃い国作り神話が伝わっている。

詳細は「ヤマタノオロチ」、「因幡の白兔」、「大国主の神話」、および「大国主の国づくり」を参照と書かれている。

ここで、記紀に書かれていることを神話と呼ぶのには若干の違和感を覚

える。筆者のイメージでは、神話は民間で伝承されたもので、支配者が作成した正史に書かれたものを神話と呼ぶことが出来るのか。

Wikipedia「神話」

神話(英: Myth、Mythology)は、人類が認識する自然物や自然現象、または民族や文化・文明などさまざまな事象を、世界が始まった時代における神など超自然的・形而上的な存在や文化英雄などとむすびつけた一回限りの出来事として説明する物語であり、諸事象の起源や存在理由を語る説話でもある。このような性質から、神話が述べる出来事などは、不可侵であり規範として従わなければならないものとして意義づけられている。

Weblio 辞書> デジタル大辞泉「神話」では、

1 宇宙・人間・動植物・文化などの起源・創造などを始めとする自然・社会現象を超自然的存在（神）や英雄などと関連させて説く説話。

2 実体は明らかでないのに、長い間人々によって絶対のものと信じこまれ、称賛や畏怖の目で見られてきた事柄。「地価は下がらないという神話」「不敗神話」

Weblio 辞書> 世界宗教用語大事典「神話」では、

世界各地で、古くから人々の間に語り継がれている、神を中心とした物語。古代人・未開人が、宇宙・人間・文化の起源などをはじめとする自然・社会現象を超自然的存在の関与の結果として基礎づけ、説明した説話。神

聖な真実として信じられ、日常生活の規範として機能する。とくに自然現象や自然物の成立した起源・活動などを述べた神話を自然神話と呼ぶ。神話の起源・成立・発展・分布・機能などを研究する学問を神話学(mythology)という。とくに一九世紀以来、比較神話学の名で発展した。

筆者の印象で述べた、民間で伝承されるは、世界宗教用語大事典に書かれている、古くから人々の間に語り継がれている、のほうが雰囲気が出ています。違和感は、構成する個々の話は語り継がれていたかもしれないが、話の大筋が語り継がれていたと感じられないということではないかと思う。用語的には、民間で伝承されていたものは説話と呼ばれている気がする。

記紀は、一定の意図の基に、自信の伝承を含め、語り継がれた話を組み立てたと考える。

Wikipedia「大国主」の記事を引用しておく。

古事記・日本書紀の異伝や新撰姓氏録によると、須佐之男命の六世の孫、また日本書紀の別の一書には七世の孫などとされている。父は天之冬衣神、母は刺国若比売。また日本書紀正伝によると素戔鳴尊の息子。

須佐之男命の娘である須勢理毘売命との婚姻の後にスクナビコナと協力して天下を経営し、禁厭、医薬などの道を教え、大物主神を祀ることに

よって葦原中国の国作りを完成させる。だが、高天原からの天照大御神の使者に国譲りを要請され、対話と武力を交えた交渉の末に幽冥界の主、幽事の主宰者となった。国譲りの際にかつて須佐之男命から賜って建立した富足る天の御巢の如き大きな宮殿(出雲大社)を修復してほしいと条件を出したことに天津神が約束したことにより、このときの名を杵築大神ともいう。

大国主神を扱った話として、因幡の白兔の話、根の国訪問の話、沼河比売への妻問いの話が古事記に、国作り、国譲り等の神話が古事記と日本書紀に記載されている(但し、日本書紀では大国主神という神名ではない)。出雲国風土記においても多くの説話に登場し、例えば意宇郡母里郷(現在の島根県安来市)の条には越ハ口を大穴持命が平定し、その帰りに国譲りの宣言をしたという説話がある。また山陰、四国、近畿、三遠信、北陸、関東など広範囲における地方伝承にも度々登場する。

須佐之男命は高天原から追放された、を考えてみよう。これを、天照大御神＝卑弥呼の居る所から追放されたと理解すれば、朝鮮半島から日本列島に亡命したことになる。この子孫とすれば、出雲には、倭と同様な国があったことになる。

よく知られている大国主命の話から、兄にいじめられていたということは、抗争があり、劣勢だったのではないか。この劣勢な勢力と講和し、そ

の領地を保証し、(傀儡政権をつくり、)岩見を支配下に置いたと考えている。表 VI02 三位以上の名神大社の比定社で、出雲大社と同じ正二位の神階が与えられた熊野大社が松江市にある。熊野大社が正二位というのは、久留米の高良大社の従一位と同様に驚きであった。高良大社が熊襲への備えではなかったのかという考察から、熊野大社も出雲に対する備えではなかったのかと、思ったが、示唆するような資料は見つからなかった。熊野大社の祭神は伊邪那伎日真名子 加夫呂伎熊野大神 櫛御氣野命のみであるという。祭神が1柱という神社は、13.3 節で取り挙げた神社では、静火神社・生田神社・大山祇神社である。

中国地方は鉱物資源に富んだところであった。古代においては、大山の存在が、白頭山と北朝鮮(と満州南西部)との関係と同様かもしれない。

吉備と出雲は東遷に立ちはだかる大きな勢力であったが、征服の経緯についてはかなり異なるようである。%% 差異: 都とした(一定期間常駐した)。以後東遷の兵站になった。一方、国としては残されたが、勢力は削がれた。

播磨

古くは、吉備の一部であったようだ。

Wikipedia「顕宗天皇」と「仁賢天皇」で、即位の部分は記紀の要約と思われる、後者を引用する。

安康天皇 3 年、天皇が暗殺された後に父の市辺押磐皇子が大泊瀬皇子（後の雄略天皇）に殺されると、弟の弘計王（後の顕宗天皇）と共に逃亡して身を隠した。まず丹波国与謝郡（丹後半島東半）に逃げ、後には播磨国明石や三木の志染の石室に隠れ住む。兄弟共に名を変えて丹波小子と称した。縮見屯倉首に雇われて牛馬の飼育に携わっていたが、清寧天皇 2 年に、弟王が宴の席で王族の身分を明かした。清寧天皇は、子がなかったため喜んで迎えを遣わし、翌年に 2 王を宮中に迎え入れた。4 月に億計王が皇太子となった。同 5 年に清寧天皇が崩じたときに皇位（王位）を弟王と譲り合い、その間は飯豊青皇女が執政した。古事記では、2 王が身分を明かして宮中に戻ったのは清寧天皇の崩御後、飯豊王の執政中のことであるとする。翌年、弟王が即位（顕宗天皇）したが]、わずか在位 3 年（古事記では 8 年）で崩御した。これを受けて、億計王が仁賢天皇元年 1 月に即位した。3 年 2 月に石上部舎人を、5 年に佐伯造を置いた。また、6 年 9 月に高麗へ日鷹吉士を遣わし、皮の工匠などの手工業者を招いたという。仁賢天皇の時代は国中が良く治まり、人民から、天下は仁に帰し、民はその生業に安んじている、と評された。

まず、顕宗天皇(弘計王)と仁賢天皇(億計王)は丹波国与謝郡に逃げ、後には播磨国明石や三木の志染の石室に隠れ住んだということである。清寧天皇により兄の仁賢天皇が皇太子となった。清寧天皇崩御後、皇位を譲り合った後、弟の顕宗天皇が皇位に就いた、ということである。兄弟が皇位を譲り合い弟が皇位に就くというてんだけでは、菟道稚郎子と仁徳天皇も同じである。

皇位を譲り合うということは、ないとは言えないが、違和感を覚える。実際には、皇位をめぐる争いがあり、これらの経過は、記紀編纂時の主流派にとって、知られたくなかったと思っている。

皇位継承をめぐる抗争は、皇子と彼を援助する豪族の争いである。

本稿の立場からは、隠れ住んだのではなく、中国自動車道ルートで、播磨国明石や三木の志染まで侵攻した。陸上兵力は畿内の王朝より大きく、王朝ではなかったかと思っている。

播磨広域連携協議会 > コラム・連載 播磨国風土記デジタルライブラリー > [「播磨国風土記のコンテンツ」](#)

には播磨風土記の訳が載せられたいる。

エキサイト辞書「[縮見屯倉](#)」

兵庫県三木市志染町付近にあった屯倉。この地は播磨国風土記美嚚郡志

深里, 和名抄同郡志深郷の故地にあたる。日本書紀の清寧2年条によると, 播磨国の司の山部連の先祖, 伊予来目部小楯が, 縮見屯倉首忍海部造細目のもとに身をよせていた市辺押磐皇子の子, 億計・弘計両皇子(仁賢・顕宗天皇)を新室の宴で見つけだしたとある。古事記では, 山部連小楯が播磨国宰として赴任したとき, 志自牟なる人物の新室の宴席で2皇子を見いだしたとある。また播磨国風土記では, 針間国の山門領に派遣された山部連小楯が, 志深村首伊等尾の新室の宴で2皇子を見つけたとある。このように3所伝は, 細部で異なる点もあるが, 志深付近の在地の豪族(村首)がこの屯倉の管理者(屯倉首)となっており, この屯倉を含めて播磨地方に所在した倭政権の田地の経営を, 中央から派遣される司が監督し収取も行っていたことがうかがえる。

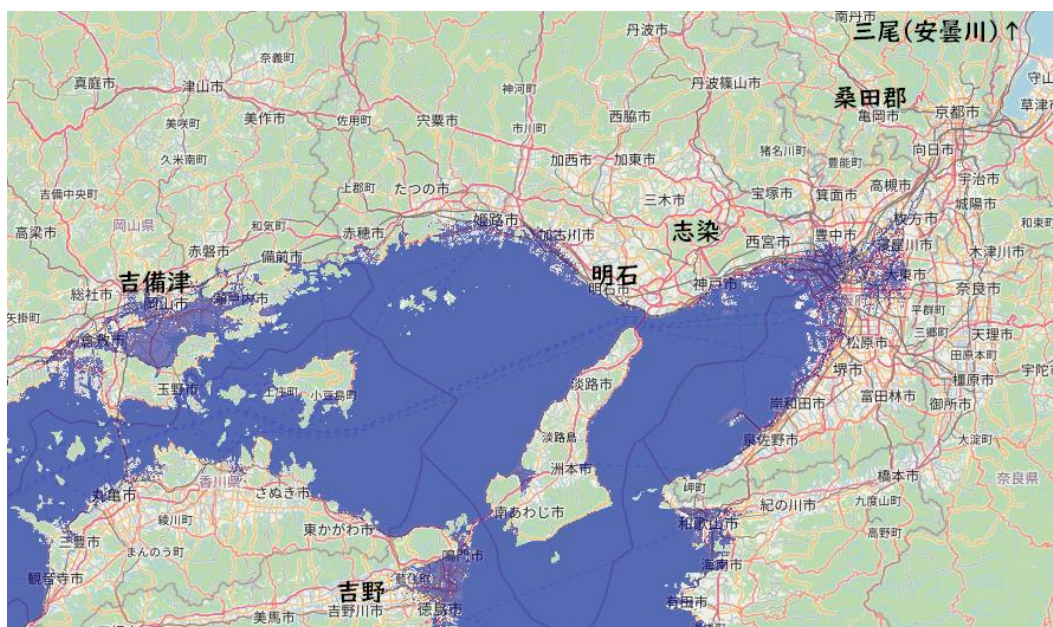


図 IX23 Flood Maps 吉備から河内

阿波・淡路（阿波路、淡路）

淡路島は国生みにおいて、古事記には現れないが、日本書紀では、一書第1では2番目だが、他は1番目に挙げている。また、神階が一品の伊弉諾神宮があるのだが、記事は少ない。

倭鉄の道で取り挙げられている四国と淡路島の遺跡は

[「今治市 高橋佐夜ノ谷\(2\)製鉄遺跡をたずねて」](#)

[「卑弥呼の邪馬台国」の候補地を訪ねる【2】](#)」では善通寺・旧練兵場遺跡

[「伊弉諾神宮 国生み神話の島」淡路島で 大量の埋納銅鐸出土【2】](#)」

である。いずれ読んでみたいが、考古学的な文献を読むのは簡単にできることではない。

淡嶋(国)に関しては神代上巻に

生子水蛭子 此子者入葦船而流去 次生淡嶋是亦不入子之例

に続き、これは手順に間違いがあった結果と書かれている。この後、正しい手順で、国生みの話になる。

出雲と菟道と同じように、淡嶋(国)と淡路が考えられる。阿波も出雲と同じように、反攻しなければそのままにしておくようであったと考える。

Flood Maps の図では、四国の瀬戸内海沿岸は現在と殆ど差がない。こ

れは大きな川がないことによるであろう。これから平野部は少なく、吉備のように倭王国を脅かすような勢力がなかったと思われる。征服も容易で、物語として残るようなことがなかったのではないか。

難波

神武東征では、難波之碕に到達した後、河内国草香邑青雲白肩之津にいった。河内国一宮の枚岡神社はこの近くにある。難波之碕は大阪城辺りと思っている。周辺の平地は干潟か湿地ではなかったか。この後、生駒越えと龍田越えで敗れ、紀伊に廻り、宇陀に入った。

河内湖東岸(生駒山西麓)を攻略した山陽道沿岸航行ルート(王朝)と紀ノ川を侵攻した南海道ルート(勢力軍隊(王朝)の話を一つにしたのではないかと考えている。

この他に、陸上部隊による山陽道ルートと中国自動車道ルートの勢力が考えられる。また、推古天皇紀の裴世清の記事での難波大都建設の記事があり、難波大都を造ったのは、上の勢力か、別の勢力か。とにかく、港として堺が重要になってきた。

倭・大倭・大和

奈良県歩け歩け協会「[設立 30 周年記念 下ツ道ウォーク](#)」にあった古道の地図を引用する。

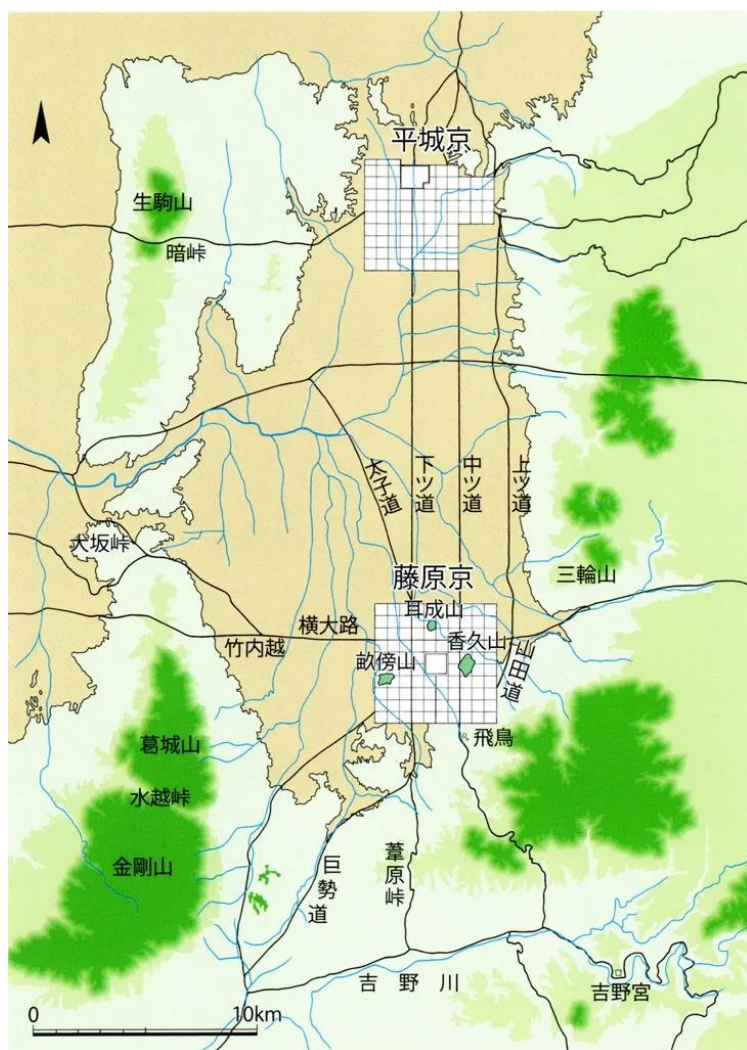


図 IX24 大和の古道

Wikipedia「大和の古道」の上ツ道・中ツ道・下ツ道概要では、南北にまっすぐ通る三道は、ほぼ4里(一里=531m、四里で約2120m)の

等間隔をなしており、東から順に上ツ道、中ツ道、下ツ道と平行に並んでいる。現在でも形跡が残っている箇所も多く存在する。三道の敷設年代については、日本書紀・孝徳天皇の白雉4年(653年)六月条に、处处の大道を脩治る、とあることなどを勘案して7世紀半ば頃に敷設されたと推定されている。また、日本書紀によれば、壬申の乱の奈良盆地での戦闘記事には、すでにこの三道の名が見えるので、天武朝以前には完成していたことが知られる。

国道24号線の直線部分は、藤原京と平城京の西大路に近いと思われ、下つ道の少し左側になる。また、24号線の両京の藤原京側の3等分点辺りに、唐子遺跡がある。

図V05 奈良湖 をみると、三道とも青い部分に入っている。さらに、下つ道は濃い青の領域の東端になっている。摂政在位が593年から622年である聖徳太子が通ったとされている太子道はこれら3道より少し古いことになる。太子道は、図V05の濃い青の部分を通っており、こちらが古いことには疑問が残るが、河内飛鳥と飛鳥を結ぶ道路であり、重要度は高い。

横大路以南、上つ道以東、平城京以北と生駒山地が住むに適した所といえる。湖沼地の開拓は、いわゆる、渡来系氏族によるものと思われる。

これら3道より古いとされている山の辺の道が、上つ道の右側に、ある。

この道は、春日大社→新薬師寺→白毫寺→石上神宮→長岳寺→大神神社
→・・・と結ぶものである。

平城京と藤原京を結ぶ道が3本もあるのは疑問に思ってきた。東京・横浜間も2本となったのは明治の中頃である。古代にも二重行政があったのか。3本だから三重行政か。

奈良湖と関連付ければ、上・中・下の順に通れるようになり、下つ道が出来たのは、平城京造営にそれほど遠くない時期ではないかと考える。

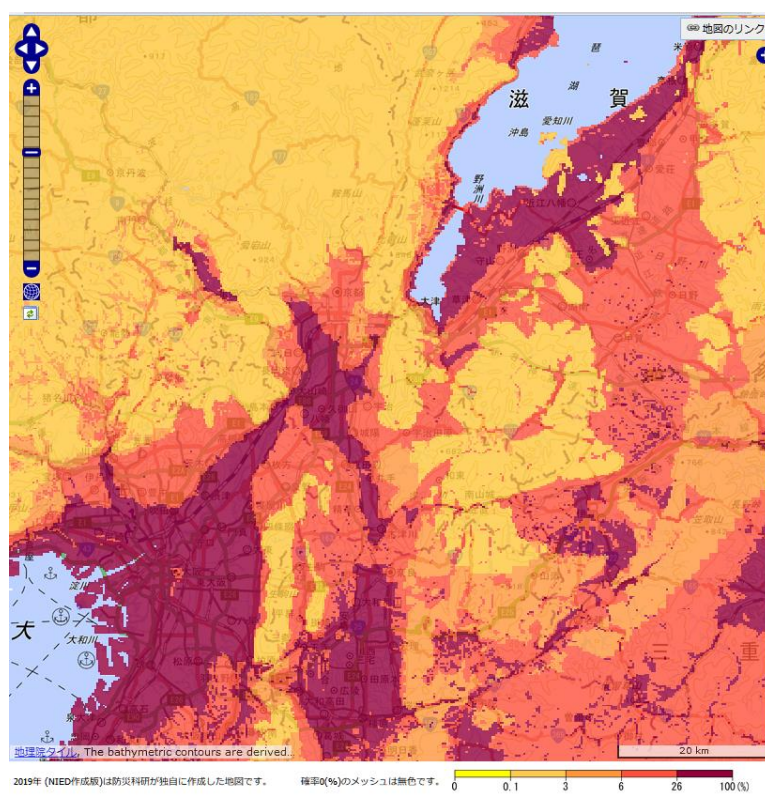


図 IX25 J-shis 京阪奈

西国街道と東海道・中山道はオレンジと紫の境辺りを走っている。

紀伊(紀ノ川流域)

18.3. 節で考察したが、紀ノ川流域の生産性は奈良盆地より上であったかもしれない。また、飛鳥から西国、特に南海道、に向かうには、吉野から川を下るルートは、現在よりも重要であったかもしれない(図 IX23)。

吉野

吉野について調べたが、応神天皇紀から継体天皇紀でヒットしたのは、次の3つの記事のみであった。

應神天皇十九年 幸吉野宮 時國樸人來朝之 因以醴酒獻于天皇 而歌之曰

雄略天皇二年 478 幸于吉野宮

四年 480 行幸吉野宮

この次にヒットしたのは

欽明天皇十四年 585 天皇命畫工造佛像二軀 今吉野寺放光樟像也

である。この次は

孝徳天皇四年 648 古人大兄避座逡巡拱手辭曰・・・臣願出家入于吉野

大化元年 645 或本云 古人大兄 此皇子入吉野山 故或云吉野太子

齊明天皇二年 656 又作吉野宮

五年 659 天皇幸吉野而肆宴焉

天智天皇十年 672 東宮見天皇 請之吉野脩行佛道 天皇許焉

天武天皇前文 天智天皇四年入吉野宮

元年 673 從吉野宮追至

以後と持統天皇紀では多数

孝徳天皇以降の吉野は奈良県であろう。ここでは、吉野とあるだけで、吉野宮とは書かれていない。欽明天皇に現れるのは吉野寺である。

雄略天皇紀以前の記事と孝徳天皇紀の記事とは時期的にかなりはなれており、同じ吉野としてよいだろうかという疑問が生じる。雄略天皇記の2年と4年の記事であるが、4年の記事は英語の前置詞に相当する字がないのも気になる。

コトバンク「吉野宮」百科事典マイペディアの解説

奈良県の吉野川右岸にあった古代の離宮。所在地については諸説あったが、現在は吉野町宮滝の地にほぼ確定された。古事記・日本書紀には応神天皇・雄略天皇が吉野宮に行幸した記事がみえるが、7世紀中頃の造営と推測されている。壬申の乱(672年)の前の半年間、大海人皇子が隠棲し、679年には天武天皇が皇后と6皇子を伴って吉野宮を訪れ、有名な吉野の盟約を行った。持統天皇は在位中に31回吉野宮に行幸し、その後も文武・元正・聖武の各天皇が行幸した。聖武天皇の時代には、吉野宮の維持管理のため

一時吉野監が設置されていた。懐風藻・万葉集には、吉野宮行幸に供奉して詠まれた詩歌が多数収められている。宮滝遺跡から建物跡や柵列が検出されており、さらなる調査が待たれる。

世界大百科事典 第2版の解説

奈良県の吉野川右岸にあった古代の宮。元来の吉野は中央構造線の走る吉野川右岸の野や山を指しており、吉野寺(比曾寺とも、大淀町比曾)、吉野山口神社(吉野町山口)、吉野宮がこの地域に所在した。古事記・日本書紀によれば、応神・雄略朝に吉野宮に行幸した記事がみえるが、確実には656年(斉明2)に造営されたとみるべきだろう。壬申の乱の勃発前夜に大海人皇子(後の天武天皇)は半年余吉野宮に隠栖していたし、679年(天武8)5月5日に天武天皇は皇后(後の持統天皇)や草壁皇子以下の6皇子と、吉野宮で有名な誓約を行っている。

Wikipedia「吉野宮」

吉野宮は、大和国・吉野川の側に置かれた古代日本の離宮。

日本書紀には応神天皇や雄略天皇の吉野行幸の記事が見られるものの、確実に離宮が存在したと言えるのは、斉明天皇2年(656年)にある吉野宮造営の記事以降のことになる。その後、天智天皇崩御の際に弟の大海人皇子(後の天武天皇)が妃の鸕野皇女(後の持統天皇)や子供の草壁皇子とも

に吉野宮に隠棲したが、後に弘文天皇(大友皇子)と対立してここで挙兵した(壬申の乱)。こうした事情もあってか、天武天皇は同8年(679年)に皇后となった鸕野皇女や草壁皇子らを連れて吉野宮に行幸した(吉野の盟約)。その後、天武天皇および皇太子となっていた草壁皇子が相次いで没し、やむなく鸕野皇女が即位して持統天皇になったが、在位中に31回、孫の文武天皇に譲位後の大宝元年(701年)にも行幸しており、通算して33回の吉野宮行幸を行っている。文武天皇・元正天皇・聖武天皇によってその後も吉野宮への行幸が行われ、吉野宮の管理のために芳野監という官司が設けられたことが知られている。

吉野宮がどこにあったかについては過去において様々な説が行われてきたが、吉野川の右岸(北側)にある宮滝遺跡(奈良県吉野郡吉野町)の発掘調査によって複数期にわたる建物群の遺構および瓦や土器などの出土品が発見され、同遺跡が吉野宮の遺跡であることが確実なものとなった。

Wikipedia「吉野」

吉野は、大和国南部(現在の奈良県南部)一帯を指す地名。特に吉野山から大峰山にかけての山岳地帯をいう。大峰の山々は熊野まで連なり、大峰への道は修験者によって熊野から開かれた。吉野は口吉野と奥吉野に分かれる。なお、吉野は吉野山あるいは吉野宮(宮滝遺跡)を指す場合もある。

日本書紀の神武紀や応神紀では大和人と異なる生活様式をもつ國樸人

の居住地として描かれているが、蛮夷としてではなくむしろ畏敬の念をもって表現されている。柿本人麻呂は万葉集(巻 1-36)で吉野を国と表現するなど、大和国の一部ながら国中や宇陀とは別の盆地状の独立した地域として捉えられていたとされる。このようなことから吉野には吉野宮が造営されたほか、奈良時代には国と郡の中間の行政単位の監が置かれたことがある(芳野監)。また、古人大兄皇子や大海人皇子(天武天皇)が落ち延びた地となり、また後醍醐天皇が南朝を開いた地となったのも吉野の地形的特徴が背景にあると考えられている。

先史：吉野川流域からは、縄文時代から弥生時代にかけての土器や遺跡が発掘されており、この時代から人々が居住していた。現在のところ一番上流で発見されている遺跡は川上村の宮の平遺跡である。

宮の平遺跡：川上村の 丹生川上神社上社が、大滝ダム建設に伴い水没するため、境内の発掘調査が行われた。本殿跡では 11 世紀末に遡る自然石を敷き並べた祭壇跡が出土し、周辺からは縄文時代中期から後半にかけての祭祀遺跡と見られる、環状配石遺構が出土している。

また吉野川流域にも多数の古墳が作られているが、完全な形で残っているものは少ない。現在、県の史跡として保存されているものとしては、以下の古墳がある。

五條市：南阿田大塚山古墳

下市町：岡峰古墳

古代：吉野は芳野と表記されることもあり吉野川に続く河岸段丘の美称に由来するとされている。記紀ではまず日本書紀の神武前紀に天皇欲省一吉野之地(天皇、吉野の地を省たまはむと欲して)との件があり、その記述から五條市阿太から吉野町国栖にかけての吉野川流域のことであるとされている。さらに人文地理学での野と呼ばれる地形の考察から、吉野川右岸の比曽寺周辺の呼称と考えられている。一方、古事記では吉野河の河尻・吉野の首等の祖・吉野の国巢の祖が登場する。

吉野河の河尻：河尻とは下流域や河口付近を指すが、そうなると和歌山県の紀ノ川（吉野川）河口となる。そのため江戸時代の国学者・本居宣長が古事記伝で河尻は川上(現在の川上村)の書き間違いだとしている。また吉野河の河尻で阿陀の鵜養の祖に会ったとあり、この阿陀が現在の五條市南阿田ではないかとも考えられている(南阿田には阿陀比売神社がある)。また、野はしばしば遊獵の場所を意味し、娯楽だけでなく山野の精霊の持つ呪力を身に付ける儀礼的な意味もあった。

以下に吉野を訪れた天皇・貴族を列記する。(省略)

列記された天皇・貴族のうち、持統天皇以前は、応神天皇・雄略天皇・斉明天皇・古人大兄皇子・大海人皇子(天武天皇)・持統天皇(鸕野讃良皇女)であり、この節の初めのリストでの吉野宮にかんするものと一致する。

ここで、阿波に吉野川があり、現在の阿波市吉野町柿原・吉野町西条・吉野町五条は、町村合併で阿波市となる前は、吉野町であった。

古代史において、阿波・伊予は印象が薄い。本稿の立場からは、吉野を含めて、検討を要すると考えている。

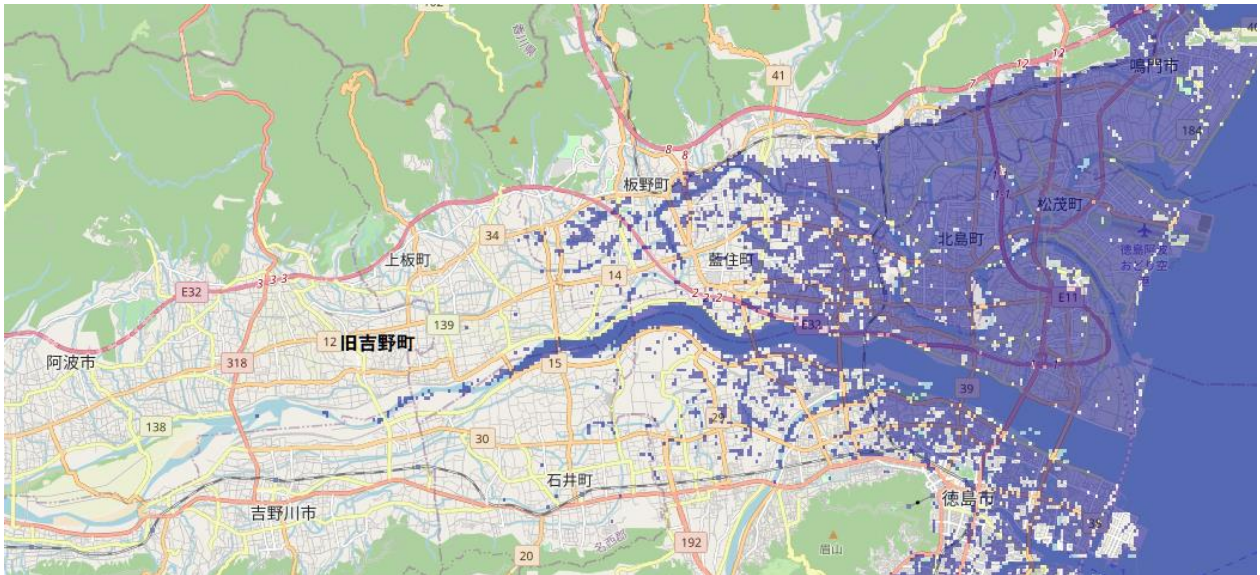


図 IX26 吉野川(四国)中下流

熊野

熊野からは、熊襲も思い浮かぶ。熊襲は、九州中南部で支配地域外を熊襲と呼んだのではないかと考えた。これから、吉野以南を熊野と呼んだのではないとも考えられる。神武天皇紀では、(紀伊の)名草邑と菟田下縣の間に書かれている。

熊野本宮観光協会「[熊野古道](#)」にあった熊野古道の図を引用する。



図 IX27 熊野古道

この図で、緑色の縦の線で、左側の下部分は国道 168 号線で、上は橋本市、右側は、ほぼ、国道 169 号(右側の緑)で上は吉野町であろう。神武東征の熊野の部分は紀ノ川を遡り、どちらかをたどったと考えている。

Wikipedia「熊野三山」から、

熊野三山は、熊野本宮大社、熊野速玉大社、熊野那智大社の3つの神社の総称。熊野三山の名前からわかる通り、仏教的要素が強い。日本全国に約3千社ある熊野神社の総本社である。

熊野の地名が最初に現れるのは日本書紀の神代記で、神産みの段の第五の一書に、伊弉冉尊が死んだとき熊野の有馬村(三重県熊野市有馬の花窟神社)というところに葬られたという記述がある。国家が編纂した歴史書(正史)に熊野の名が登場するのは日本三代実録からである。

インテルメディオ (Part IX あとがき)

12章から17章までを念頭において、女王国への行程と倭の東遷について、もう一度考えてみた。不彌国までは以前と変わらない。遠賀川河口部にはFlood Mapsから、筑紫湖があったと思われる。これから、中間市か直方市を候補地とした。水行二十日の推定次第では、飯塚・田川辺りも考慮の対象となると考えている。邪馬台国は、遠賀川・山国川流域か筑後川・山国川流域のどちらかと考えた。なお、河内湖から上流に向かい、龍田で戦ったという神武東征の話と類似性を感じる。

神武東征に現れる地名と、国産み神話に現れる国(洲)を併せた図 IX03で、山口県が殆ど空白である。Wikipedia「総領」に、坂東・吉備・筑紫・伊予・周防などに総領が置かれたと書かれている。日本書紀では、天武天皇紀に筑紫大宰・吉備大宰が、文武天皇紀に筑紫総領・周防総領・吉備総領が確認できる。坂東を除いたものは、東遷中に倭王が滞在した所、すなわち、邪馬台国があった所と考えていて、邪馬台国の跡地を直轄地とし、地方官を置き、周辺を統治したと考える。

東遷は皇子を統率者とする複数の軍団により並行して為されたと考えている。結果的に到達地は近畿地方となった。

志賀京や紫香樂京は東遷の再開とみることもできると思えるが、どちらも近畿地方の範囲である。この2京は、東山道を利用しやすいところに都

を移したといえる。さらなる東への遷都がなかったのは、大陸との往来に時間がかかりすぎるのが大きいと考える。この見方からは、江戸遷都は最後の東遷ともいえるかもしれない。江戸はこれまでの都と異なるのは、見栄えのする山が近くになくことである。倭王の都としては、見栄えの良い山がないと落ち着かないようである。東北遷都が噂されたことがあったが、岩木山のある盛岡が適地ではないか。これは、明治憲法の制定まで、形式的には、律令制度が続いていたというのと、似た与太話である。

この後は、17章の後半で試みた方法で、他の地名・官職名などの固有名詞について調べていく予定である。各天皇紀には、宮の建設と陵の名前が書かれている。これらは〇〇△△宮(陵)の形式で書かれているのが殆どである。この〇〇の部分地名と思われる。また、后妃とその生んだ皇子皇女がまとめた立後の記事に続き書かれている。まずは、これらを図表化して眺めていくことから始める。

続いて、日本書紀を推古天皇紀まで読み続ける予定である。日本書紀は持統天皇までを扱っているが、古事記は推古天皇で終わっている。しかも、前文で34文字で名前のみである。

Part IX 目次

序	2
18. 東遷追考	3
序	
18.1. 三国志の国々	8
18.2. 壺与(伊予)・台与(豊)	24
18.3. 古事記の神武東征	37
18.4. 神武東征補考	43
18.5. 王朝について	60
18.6. 東遷追考	69
インテルメディオ (Part IX あとがき)	110